

# 梨の木沢・中道通・御射 山沢・梨の木沢西遺跡

御射山地区県営畑地帯総合土地改  
良事業に伴う緊急発掘調査報告書

1990

長野県原村教育委員会

# 梨の木沢・中道通・御射 山沢・梨の木沢西遺跡

御射山地区県営畑地帯総合土地改  
良事業に伴う緊急発掘調査報告書

1990

長野県原村教育委員会



四耳壺出土状態（梨の木沢遺跡第1号住居址）



焼土検出状態（梨の木沢遺跡第2号住居址）

## 序 文

このたびの発掘調査は、県営畑地帯総合土地改良事業に伴い、諏訪地方事務所から委託を受けた原村教育委員会が、中新田地区の4遺跡において実施しました。

4遺跡は、いずれも標高1000mを越える高所にあり、過去に本格的な発掘調査が行われたことがなく、その内容は明確にはされていませんでした。

調査の結果、梨の木沢遺跡からは平安時代の人々の生活の跡や貴重な遺物が発見され、また中道通遺跡からは縄文時代の遺物を得ることができました。これによって八ヶ岳の西南麓に位置する原村の歴史に、また一つ新たな事実を加えることができたものと思います。調査の成果が、今後の埋蔵文化財保護と地方史・考古学の研究に活用されることを願って止みません。

なお、発掘調査に際して賜わった、諏訪地方事務所土地改良課の方々のご配慮をはじめ、地元の土地改良事業実行委員会各位と地権者の皆様の御理解と御協力に対し心からお礼申し上げます。また、全面にわたりご指導いただいた長野県教育委員会と文化課の担当の方々、梅雨期から初秋にわたる困難な調査に従事して下さった皆様、そして調査報告書作成に至る過程で御尽力、御協力いただいた方々に深く感謝申し上げます。次第です。

平成2年3月

原村教育委員会

教育長 平林 太尾

## 例 言

1. 本書は、「平成元年度御射山地区県営畑地帯総合土地改良事業」に伴って実施した長野県諏訪郡原村に所在する梨の木沢・中道通・御射山沢・梨の木沢西遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は諏訪地方事務所の委託により、国庫及び県費から発掘調査費補助金の交付を受けて、原村教育委員会が平成元年6月20日から9月27日まで実施した。整理作業は10月7日から平成2年3月20日まで原村歴史民俗資料館で行った。
3. 現場の発掘調査における遺構等の実測・記録は五味一郎と井上智恵子、写真撮影は五味が行った。遺物整理・遺構実測図の整理等は五味・井上、遺物の実測は、亀割均・五味、原稿の執筆は、第II章1(4)のア住居址の遺物と(6)1については亀割、その他は五味が行った。
4. 遺物には梨の木沢遺跡は原村遺跡番号「65」、中道通遺跡は「中道通」を注記した。
5. 発掘調査から報告書作成にいたる過程で、長野県教育委員会文化課指導主事西原善介・小林秀夫・児玉卓文・百瀬長秀の各氏をはじめとして、武藤雄六・小林公明・樋口誠司・小林深志・守矢昌文・永坂定夫の諸氏にご指導ご教示を賜わった。記して厚く感謝申し上げる。
6. 出土品・諸記録は原村教育委員会にて保管している。

# 目 次

序 文	
例 言	
目 次	
I 調査に至る経過	1
II 調査遺跡の状況	2
1 梨の木沢遺跡	2
(1) 調査経過	2
(2) 遺跡の位置と環境	4
ア 遺跡の位置と自然環境	4
イ 遺跡の歴史的環境	4
ウ 周辺遺跡	7
エ 層 序	7
(3) 調査の方法と概要	9
(4) 遺構と遺物	11
ア 住 居 址	11
イ 溝 状 遺 構	18
ウ 小 豎 穴	20
エ その他の出土遺物	20
(5) 放射性炭素年代測定の結果	23
(6) ま と め	24
2 中道通遺跡	25
(1) 調査経過	25
(2) 遺跡の位置と環境	27
ア 遺跡の位置と環境	27
イ 層 序	27
(3) 調査の方法と概要	28
(4) 遺構と遺物	28
ア 小 豎 穴	28
イ その他の出土遺物	28
(5) ま と め	30

3	御射山沢遺跡	30
(1)	調査経過	30
(2)	遺跡の位置と環境	31
ア	遺跡の位置と環境	31
イ	層序	32
(3)	調査の方法と概要	34
(4)	まとめ	34
4	梨の木沢西遺跡	35
(1)	調査経過	35
(2)	遺跡の位置と環境	35
ア	遺跡の位置と環境	35
イ	層序	37
(3)	調査の方法と概要	37
(4)	まとめ	37
III	結語	39
	参考引用文献	
	調査組織	
	写真図版	

## I 調査に至る経過

昭和59年度から実施されている「御射山地区県営畑地帯総合土地改良事業」も5年目をむかえたが、梨の木沢遺跡・中道通遺跡・御射山沢遺跡・梨の木沢西遺跡の保護については、昭和63年8月31日に行われた長野県教育委員会の「昭和64年度の農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護協議」において協議された。しかし資料が少なく遺跡の性格及び範囲等については不明な点が多く、適切な結論を導き出すことができなかった。出席者は長野県教育委員会文化課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、原村教育委員会の4者であった。このため、表面採集をして遺跡の範囲を明確にする必要が生じ、昭和63年9月～12月にわたって表面採集調査を行った。

これによって、さらに協議をすすめ、原村教育委員会は、諏訪地方事務所の委託を受けて、平成元年6月20日から同9月27日まで緊急発掘調査を実施した。



第1図 梨の木沢遺跡調査風景  
(ボールの地点が第2号住居址検出地点 南東から)

## II 調査遺跡の状況

実際の発掘調査は、中道通遺跡(1989年6月20日～7月7日)、御射山沢遺跡(7月7日～7月25日)、梨の木沢西遺跡(7月26日～8月4日)、梨の木沢遺跡(8月4日～9月27日)の順に行ったが、御射山沢と梨の木沢西の2遺跡からは遺物・遺構とも検出することができなかったため、本書においては便宜上梨の木沢、中道通、御射山沢、梨の木沢西遺跡の順に報告してある。

### 1 梨の木沢遺跡

#### (1) 調査経過

1989(平成元)年

- 8月4日 午前中梨の木沢西遺跡の調査を終了し、午後から草刈とグリッド設定を行う。まだ作物が残っており、道路をはさんで遺跡の範囲も東西に広いため難航する。
- 8月7日 午前中テントを御射山沢遺跡から移動し、午後はグリッド設定。
- 8月8日 猛暑の中、草刈とグリッド設定を一日行う。
- 8月9日 朝、草刈をした後グリッド設定を一応完了し、東方の尾根部から発掘を始める。AR-95グリッドから石楯が出土する。
- 8月10日 東方のやせ尾根部・尾根下部の調査。尾根部 BA-95で縄文時代早期の土器片出土。BI-71は遺構のプラン様のラインが確認されたため拡張する。ラインは東西方向に続き、草のベルトなどが出土するため、東西方向のサブトレンチを設定する。BM-71は谷部のように、ローム層までかなり深くなりそうである。土師器の杯破片が出土する。
- 8月11日 遺跡の主要部分と考えられる道下の、62・67列の調査を始める。BI-71拡張区のサブトレンチからはごく新しい磁器が出土し、遺構のプランと思われたラインは畝状の溝によるものとわかる。機械による深耕に伴うものか。
- 8月17日 道下のA区の調査。縄文中期の土器片・土師器・須恵器の破片が出土し始める。BM-67からは高師小僧が3点出土した。この場所は黒色土も厚く、ある時期沼地だったことが推定された。
- 8月18日 A区の調査。AR-59は表土を除去したところ、ハードローム(中期ロームか?)と黒褐色土が、平面上はっきりした不整合ラインで現われる。黒褐色土層からは焼土・須恵器・土師器等が出土したため、住居址の可能性ありと考え東西方向に拡張する。

- しかしラインはだらだらと弓状に続くため、不整合面を精査したところ、初めてロームのかぶりと判明（後日、尾根部の土取りに伴って畑の下方へ重機でならしたものとわかる）。
- 8月21日 AR-59拡張区の南方への拡張（表土剥ぎ）と周囲のグリッド調査。AR-59拡張区のラインはロームのかぶりと判明したものの、厚い焼土と炭粒が分布するため新たに住居址の可能性がでてくる。
- 8月22日 AR-59拡張区の南方への拡張（表土剥ぎ）。遺構確認作業の結果、著しい擾乱により壁はまったく確認できないものの、焼土はカマドの火床部と判明する。ごく一部床面らしい部分も検出されたため、第1号住居址と認定する。住居址にともない、四耳壺破片と内黒土器が出土する。遺跡の南西部は、重機による表土除去を始める。
- 8月24日 第1号住居址の精査。実測・写真撮影・カマド火床部カット。その他グリッド調査。遺跡南西部・西部の表土除去（重機）。遺構等は確認されない。
- 8月25日 第1号住居址下の平面掘り下げ確認。南北方向の43列調査。遺跡西部と東部の表土除去作業（重機）。遺構等は確認されない。
- 8月26日 第1号住居址周囲のグリッド調査。53列トレンチ調査。西方のグリッドの調査。
- 8月28日 AT-47周辺と53列の調査。AT-47からは焼土が検出され、甕の破片も出土したため調査を止め、拡張することにする。
- 8月29日 53列トレンチを遺構確認のため平面発掘するが、第1号住居址地点同様、耕作等によると思われる畝状の擾乱が縦横に走り、確認できない。
- 8月30日 六部塚川沿いの北向き斜面の調査。雨のため午前中で作業を終了する。
- 8月31日 六部塚川沿いの北向き斜面の調査。小型バックホーでAT-47周囲の拡張（表土剥ぎ）。カマドらしい石組を検出。
- 9月1日 野菜の収穫が終わったため、東側尾根上の残されたグリッド調査。時期不明の小竪穴（第1号小竪穴）を検出。31列他、残されたグリッドの調査。
- 9月4日 周囲の調査を終了し、AT-47拡張区において遺構確認作業にはいる。
- 9月5日 AT-47拡張区の遺構確認作業。49列より東は耕作の畝と近代の溝（性格不明）による擾乱でほとんど破壊され、焼土のブロックが散乱する。
- 9月7日 AT-47拡張区の遺構確認作業。南の低い部分から礎をとともう溝状遺構（第1号溝址）を検出する。
- 9月8日 第1号溝址の調査。
- 9月11日 第1号溝址の調査。
- 9月12日 溝址の北に隅丸方形のプランを確認し第2号住居址と捉える。ベルトを残して調査を始める。
- 9月13日 第2号住居址の調査。写真撮影・ベルトの土層観察と実測を行いベルトをはずす。

- 9月16日 第2号住居址の調査。写真撮影・住居内の柱穴等施設の調査。
- 9月18日 第2号住居址の調査。昨日に引き続き住居址内の調査・写真撮影。クイ抜き等を始め  
る。
- 9月19日 雨天だったが、テント内にて機材の片付けを行い、一部を撤収する。
- 9月20日 機材を片付け、テントを撤収する。機材の洗浄と収納を行う。
- 9月21日 第1号溝址の実測作業と、部分精査。
- 9月22日 第1号溝址の実測作業。第2号住居址の実測作業。
- 9月25日 第2号住居址の実測作業。カマドの精査。
- 9月26日 第2号住居址の実測作業・写真撮影。カマドの精査。
- 9月27日 第2号住居址の実測作業・写真撮影。カマドの精査。作業終了

## (2) 遺跡の位置と環境

### ア 遺跡の位置と自然環境 (第2・3・4図、第1表)

梨の木沢遺跡は、長野県諏訪郡原村14926番地1付近に位置する。標高は1,065m前後を測る。中新田区の南西部にあたり、主要地方道茅野・小淵沢・韭崎線から500mの位置にある。地目は普通畑と水田である。

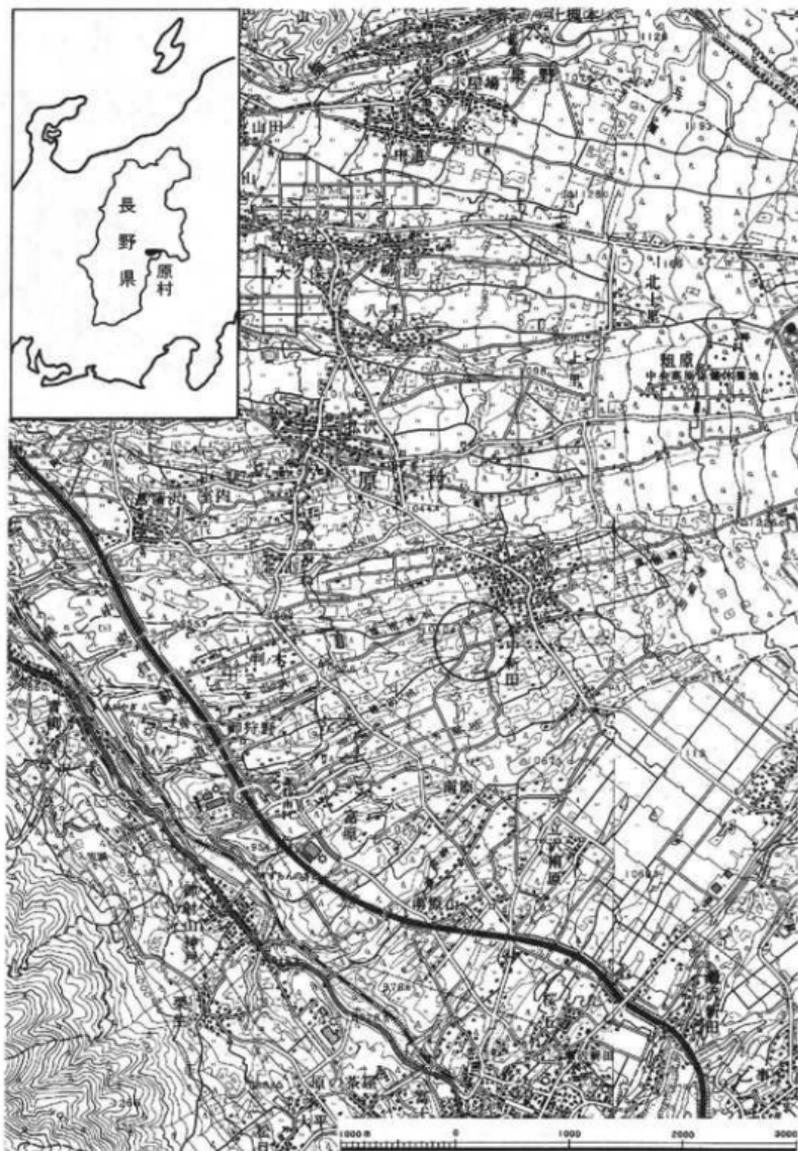
北には六部塚川、南方180mには稗田川が東西に流れる。遺跡はこの両河川の解析によって形成された帯状の平坦な尾根に位置するが、尾根幅は200m近くあり、その中にさらに不定形な痩せた尾根が形成されている。遺跡はそうした痩せ尾根の一つと、その南向き斜面を範囲とする。なかでも住居址が検出された地点は、すぐ南に比高差5～6mの小尾根がある南向き斜面で、当時は南北の風にさらされない日溜り状の良好な居住地だったことが推測される。

現在、遺跡は南北に走る農道によって二分された格好であり、また地主の話によると、農道の西側の尾根は以前大がかりな土取りを行ったとのことで、現状は以前より2～3m低くなっていると思われる。

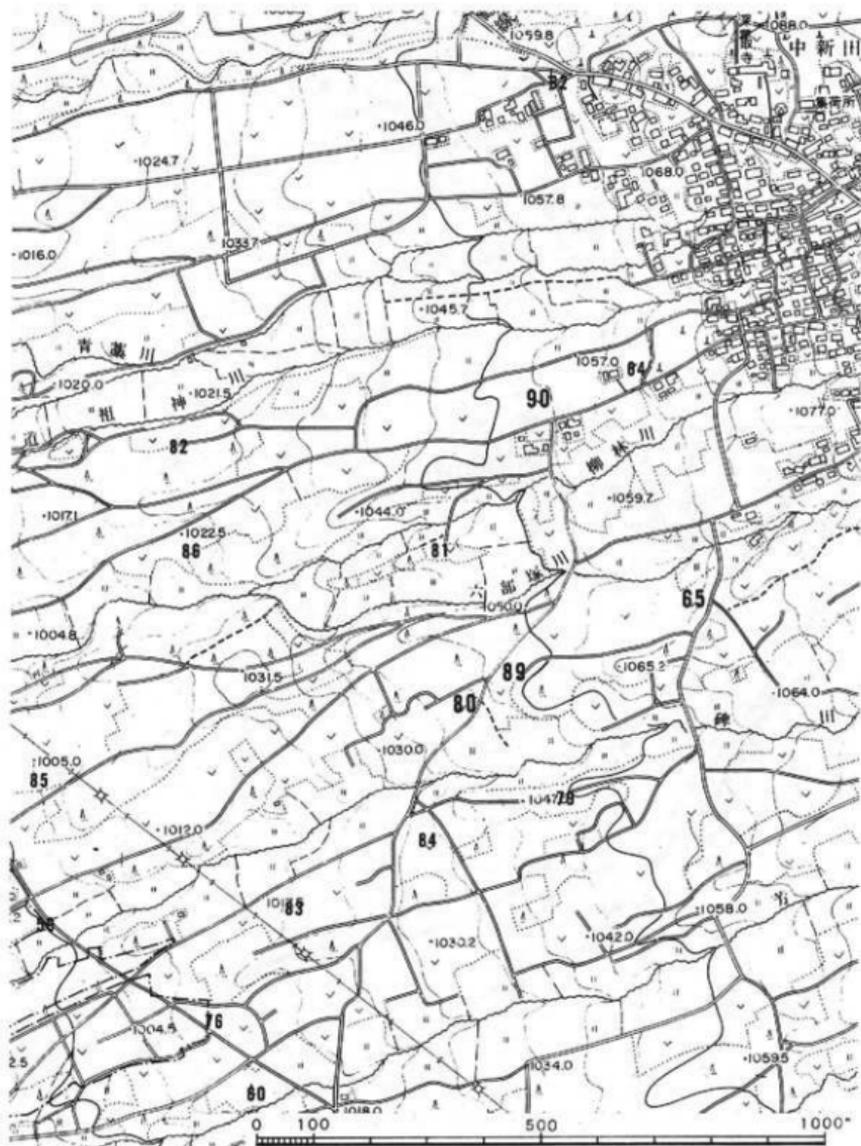
### イ 遺跡の歴史的環境

1985年発行の「原村誌」によれば、「昭和46年度分布調査の報告書で、須恵器の大甕の出土を伝えている。」「その大甕は原村教育委員会に保管されているが、口縁部を僅かに欠損する現高56.5cm、胴部最大径57cmを計る。」とあり、「その後の踏査でも付近一帯の広い範囲から竃ではあるが、平安時代の土師器・須恵器および灰釉陶器の破片が採集されている。」とある。そして広い範囲を遺跡として包括できないでいること、遺跡中心部の保存状態の悪さを指摘している。

御射山地区県管畑地帯総合土地改良事業に先立って行った1984年度分布調査では、縄文式土器・土師器・須恵器の破片を数点採集している。今回の調査にあたって推定した遺跡範囲はその



第2図 梨の木沢・中道通・御射山沢・梨の木沢西遺跡の位置 (1/50,000)



第3図 梨の木沢・中道通・御射山沢・梨の木沢西遺跡と周辺遺跡 (1/10,000)

時の採集地点に基づき、かなり広い範囲を遺跡と捉えている。また、1989年度の踏査報告書でも須恵器と土師器の小破片を採集しているが、「保存状態は極めて悪いようである。」と述べている。

いずれにせよ、本遺跡は今回の調査まで範囲や性格があまりはっきりしない遺跡であり、遺跡の中心部と思われる地点も（第1号住居址の検出された地点）破砕されたローム層を耕作土層としているため、擾乱によって相当部分が破壊されていると考えられてきた。

### ウ 周 辺 遺 跡

番号	遺跡名	旧石器	縄文					平安	中世	近世	備考
			早	前	中	後	晩				
59	御射山北						○				
60	浅間沢		○		○						
62	庚申				○						
64	古屋敷				○						
85	梨の木沢		○		○			○		○	
76	御射山		○			○			○	○	
79	中御射山東					○					
80	御射山沢										縄文時期不明
81	堤之尾根		○	○							
82	前沢							○			縄文時期不明
83	花表原					○					
84	中御射山西					○		○	○		
85	箕手久保							○			
86	判の木東				○						
89	梨の木沢西										内耳土器?
90	中道通				○						

第1表 梨の木沢・中道通・御射山沢・梨の木沢西遺跡と周辺遺跡

### エ 層 序

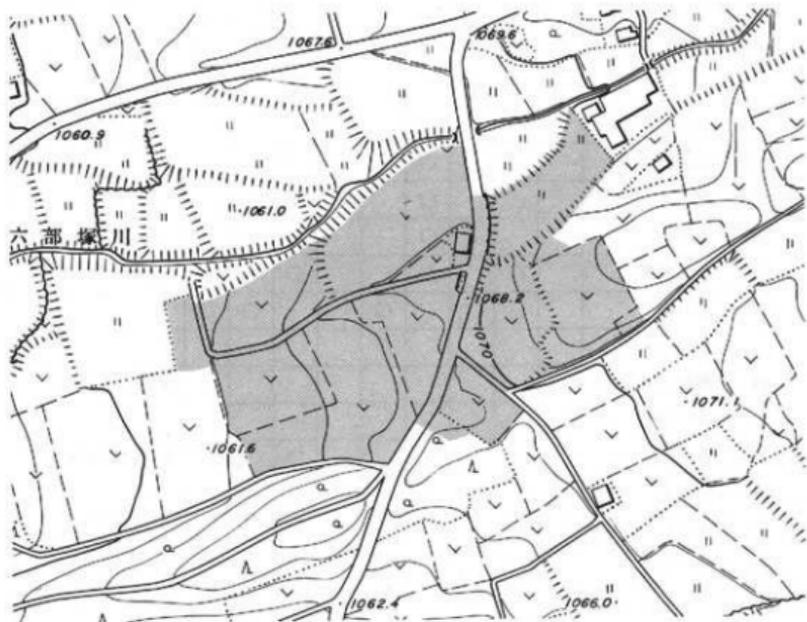
遺跡の範囲が広く、地形的にも起伏が多いため、層序・層相は一定していない。とりわけ尾根斜面上部と谷部では基本的な層序が異なっている。以下に住居址検出地点におけるそれぞれの観察記録を記す。

### 尾根斜面上部

ここは、恒常的な水の流れによって洗われていない、河床礫を出土しない部分である。住居址の検出地点の基本的な層序である。

第Ⅰ層 明褐色土層 畑の耕作土層。客土が多く、ローム粒を多く含む。もろく崩れやすい。層厚20～30cm。

第Ⅱ層 黒褐色土層 土質は均一ではなく、下層の褐色土層がまだらに入る場合が多い。上部はほとんど第Ⅰ層に削られている。しまりやや良く、やや堅い。層厚5～20cm。



第4図 梨の木沢遺跡 発掘区域図 (1/2,500)

第Ⅲ層 褐色土層 下部のいわゆるソフトローム層とは漸移的ではあるがかなり凸凹と連続する。谷部の第Ⅳ層に相当する。しまり・堅さは第Ⅱ層に同じ。層厚5～25cm。

第Ⅳ層 黄褐色土層 いわゆるソフトローム層。しまり堅さとも第Ⅲ層より良好。層の下面はいわゆるハードローム層と不整合でありⅢ層とⅣ層の層理面よりも凹凸が著しい。谷部と違いかなり安定しており、厚いところで層厚30cm。

### 谷部

現在、谷部に河川は流れていないが、かつての河床部分である。住居址検出地点あたりからこ

の層序となる。

- 第Ⅰ層 明褐色土層 畑の褐色土層。客土による赤褐色ローム粒が混ざり、軟らかくもろい。層厚13~30cm。
- 第Ⅱ層 暗褐色土層 しまりやや良く、比較的軟らかい。ごく細かいローム粒を含む。第Ⅰ層に削られて認められないグリッドもある。層厚5~18cm。
- 第Ⅲ層 漆黒色土層 上面は比較的平。下面是凹凸がある。上下に漸移層的に変化する部分も認められる。Ⅱ層より軟らかく、しまりも劣る。この層から下部に安山岩の亜円礫・亜角礫(最大50cmまで)を含む場合が多い。尾根斜面上部には認められない土層である。5~15cm。
- 第Ⅳ層 黒褐色土層 尾根部の褐色土層にあたる層で、尾根部と谷部の境界では褐色と黒色のまだら状にみえる箇所があり、谷下部ではやがて完全に黒褐色となる。しまり良くやや硬い。いわゆるソフトローム層へは漸移的に移行する。礫を含むことが多い。層厚10~40cm。
- 第Ⅴ層 黄褐色土層 ソフトローム層。礫を含む場合が多く、その間に一部見られる程度である。汚れた感じでⅣ層と入り乱れる。層厚3~7cm。この下はいわゆるハードローム層となり、やはり礫を多量に含む。

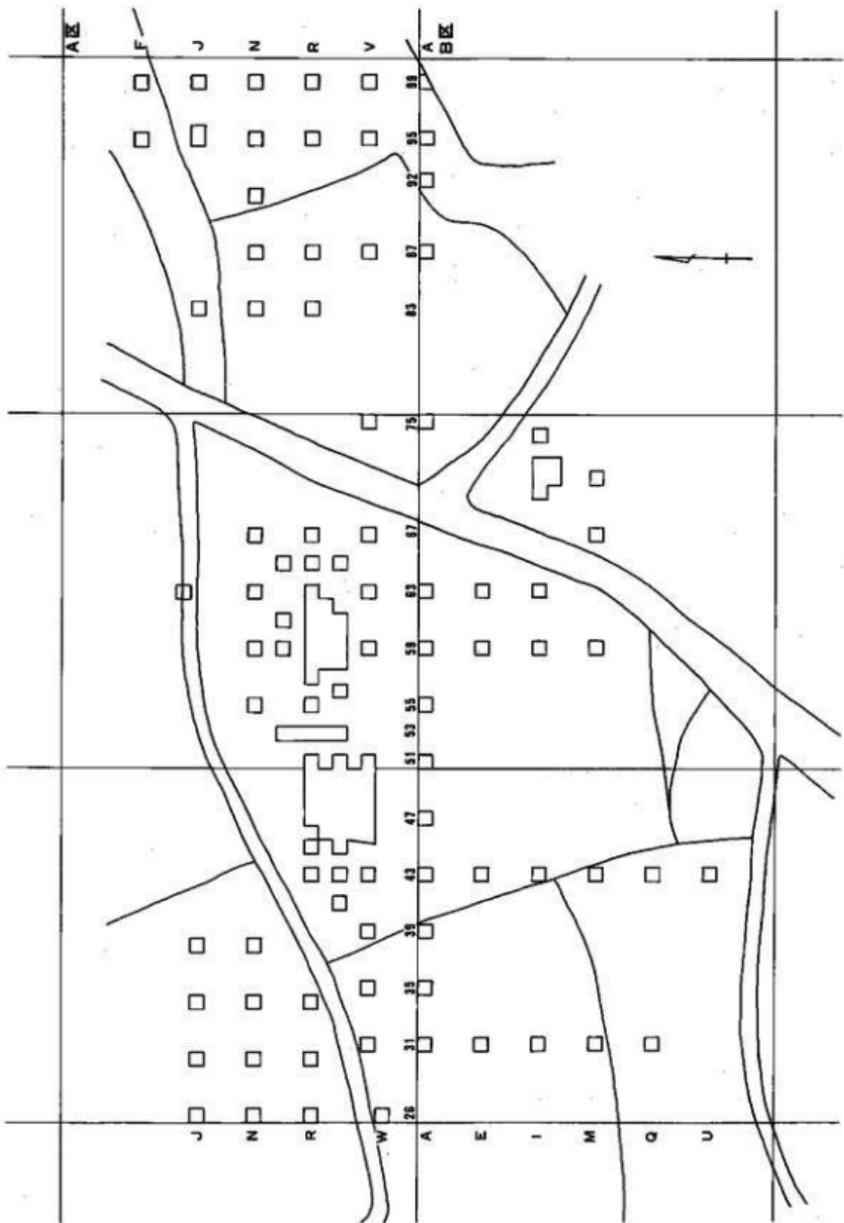
なお、第Ⅳ層の下にもう1枚、第Ⅲ層と同様の層が入る地区がある。その場合、下層のその方が層厚は厚く色調はやや明るく多量の礫を含む。たとえば、第2号住居址付近やBM-67・71グリッドなどがある。

### (3) 調査の方法と概要(第5図)

調査にあたり、まず東西南北方向(磁北による)に十文字のラインを設定した。南北方向はこの基準線からそれぞれ50mの大区分を設け、北をA区、南をB区とした。さらにその大区分の中心を2mの小区分に分け、北からアルファベットのAからY(50区分)までを振った。東西方向は大区分を設けず、南北の基準線を境に2mの小区分に句切り、西に50・49・48と小さく、東に51・52・53と大きくなるよう名付けた。これによって遺跡全体に2m×2mのグリッドが設定されたことになり、各グリッドは①南北の大区分、②南北の小区分、③東西の小区分の順に表記することで特定した(例:A1-63)。また、南北のグリッド列については「50列」のように、東西の列については「AR列」というように称している。

なお東西方向のラインは、ほぼ尾根の長軸方向に一致している。

調査は、遺跡の範囲が広いと、ある程度の間隔をおいて2m×2mのグリッドを手掘り掘り下げ、遺構等の埋没が予想された段階で発掘区を拡張する方法をとった。層位的には、いわゆるソフトローム層上面までとしたが、レキの多い地点などではその上層で調査を中止したグリッド



第5図 梨の木沢遺跡 グリッド配置図 (1/800)

もある。手掘りで調査したグリッドは135.1グリッド約540.4m<sup>2</sup>である。また、遺構等の埋没が考えにくい西方の谷部や東の尾根端部は、重機で表土を除去し確認を行ったが、遺物・遺構等は発見できなかった。

また、先に指摘した通り、本遺跡は近代から現代の攪乱によるかなりの破壊が見られるため、あらかじめ破壊状況を述べておきたい。まず、東側の尾根部の75列から87列にかけての畑は、土取りによって削られローム層を耕作土層としていた。このためグリッド発掘を省略した部分もある。なお尾根上部については、92・95・99列を調査した結果、最北部を除いてはプライマリーであった(ロームまでの層厚15~40cm)。一方、遺跡の中心部と考えられるA区の43列~67列については、以前から言われていた通り、尾根頂部(P列まで)を2~3mほど重機で削って相当量の土を運び出したとの地主の話を得た。現状はいわゆるハードローム層を耕作土としている。そして次項にも書くが、ローム層の一部を南側に押しだしており、それが以前の地表面上に厚いところでは1m近くかぶっていた。平安時代の住居址のあるレベルと一致していたため、遺構は破壊から免れた格好である。ところが、幅30~70cm、深さ80~90cmを計る2本の溝が、AS-62グリッドから第1号住居址の中央部を経て西南西に走り、第1号溝址に至る範囲を広く破壊していた。埋土の状態から水路等の遺構ではなく、掘ってすぐに埋め戻された攪乱と捉えた。付近から出土した磁器片からみて、近代の所産と思われる。

#### (4) 遺構と遺物

##### ア 住居址

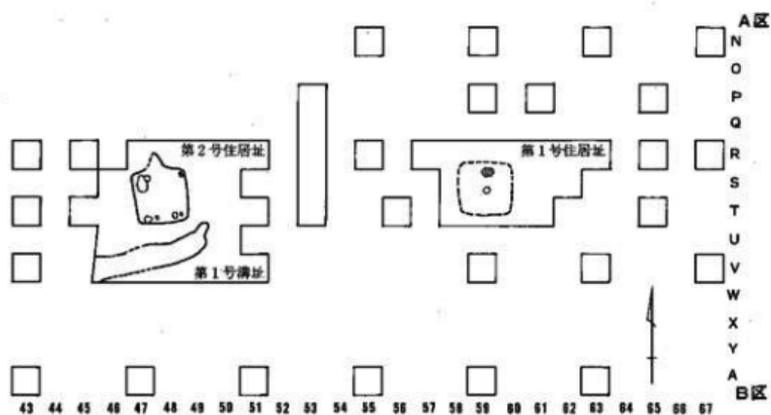
##### 第1号住居址

##### 調査経過

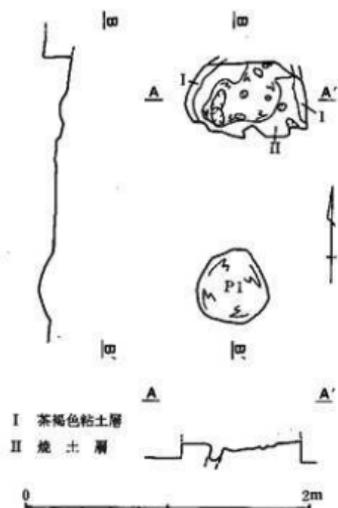
最初、AR-59グリッドの第1層を剥いだところ、グリッド中央に東西方向のラインが現われた。北側は、ぼくぼくとしたハードローム、南側は炭粒・焼土・ローム粒を含む黒褐色土層となり、あたかも住居址の埋土のようであり、須恵器(第8図5)や土師器が出土した。このため東西に4mずつ拡張し、ラインを追うこととした。拡張の結果はハードロームが弧状にだらだらと続き、住居址のプランとはならない。このためラインの不整合面を精査したところ、初めてローム層が被っていることが判明した。しかし、まだ住居址の可能性は残るため数十cmのロームを除去し、さらに発掘区をAT列まで拡張し遺構の検出を行った結果、AR・S-59においてカマドの火床部とピットを検出することができた。なお近代と思われる性格不明の溝と耕作の畝によって広く破壊されていた為、住居址の壁はまったく確認できず、床面も判然としなかった。

##### 遺構(第7図・図版3-1)

住居址のプラン、床面ともに不明である。なおカマドの火床部が辛うじて残存していたため、それから判断すると、主軸方向はほぼ北向きで、床面も四耳壺(第8図3・図版3-2)・内黒土



第6図 梨の木沢遺跡 第1・2号住居址、第1号溝址位置図(1/400)



第7図 梨の木沢遺跡 第1号住居址実測図(1/40)

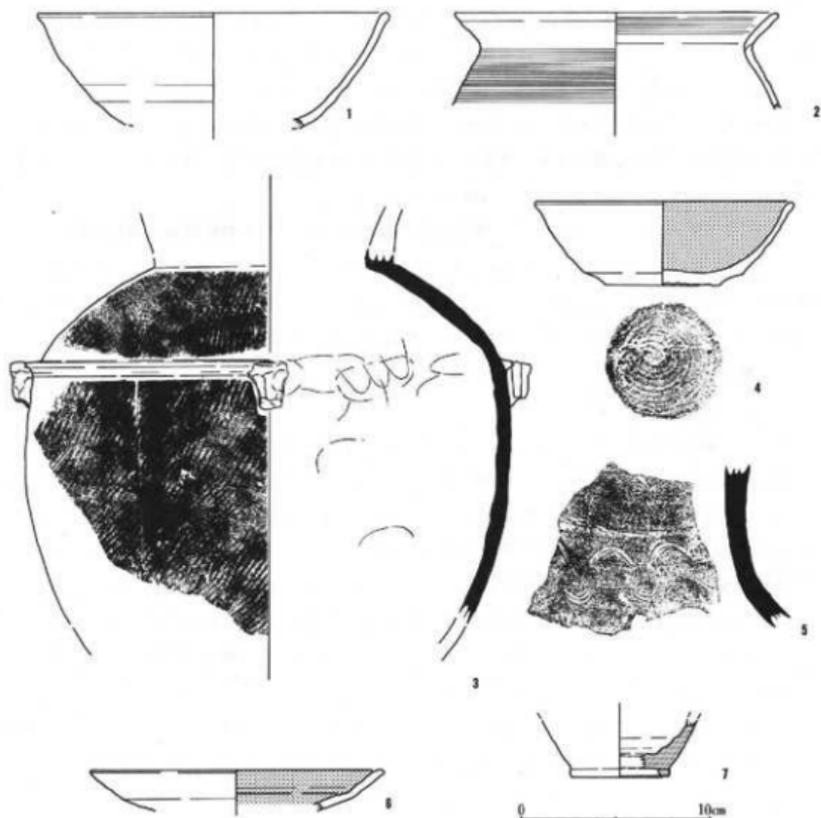
器（第8図4・図版3-2）の出土したレベルと推定された。

カマドは残存部分の値だが、東西86cm・南北54cm、焼土の厚さは4cmで、東西を粘土で固めてある。付近の攪乱層から平板状の安山岩が出土しているため、石組粘土カマドだったものが抜かれたものであろう。

P1は灰だめ状の穴で径50cm、この上に四耳壺が乗っていた。浅い椀状で埋土は灰・焼土・炭粒を多く含む。

#### 遺物（第8図）

住居址全体がかなり強い攪乱を受けているため、器形の復元できる土器は少なく、遺物の全体



第8図 梨の木沢遺跡 第1号住居址及び周辺グリッド出土遺物 (1/3)

量もわずかである。器種には、土師器・須恵器・内黒土器があり、灰釉陶器はほとんど見られない。以下各々の器種について略述する。

土師器には坏・甕がある。坏は第8図1のように口径が18~20cm、高さも6~7cm内外の大形のものや、口縁端部外面を強く押しナデて外反させ、灰釉陶器のように見えるものなどがある。1はカマド中から検出されたものであるが、ロクロ成形して内面のみに密なヘラミガキを施す。橙褐色を呈し、0.1cm大の微砂粒がやや目立って含まれている。

甕には、カキ目仕上げする2がある。胎土も均質で薄手で仕立てられ、ていねい、堅密に仕上げられている。暗い橙褐色を呈す。口径は16~17cm内外である。

須恵器には四耳壺・大形甕がある。四耳壺3は頸部から体部にかけての大破片である。最大腹径は25~30cmになると思われる。肩部に高い突帯が貼り巡らされ、未貫通の耳が付着される。外面は平行タタキ仕上げし、内面には突帯付着の際の圧痕が明瞭に残る。刻字の一部と思われる鋭い刻みがある。焼成は堅緻であるが、一部赤灰色部分が腹部に残る。

内黒土器としては坏4がある。口径14cm、高さ4.5cmを測る。体部はゆるく内湾し、端部は内面がやや肥厚して小さく外反する。底部は糸切り底で見込み部はへそ状に盛り上がる。ロクロ成形のあと、内面をタテヘラミガキし、口縁下をヨコヘラミガキする。

ところでAR~AT-58~60グリッド層中検出の遺物は、多くが第1号住居地に帰属されるものとみられる。いずれも畝・溝による攪乱で動いたものであろう。土師器・須恵器(5)・内黒土器(6)・灰釉陶器(7)などがある。5は甕頸部分で、粗雑な波状文を有す。7は壺底部と思われる。底径5cmを測る。6は口径15cm内外と大きい。灰釉段皿を真似たような器形をしている。

## 第2号住居址

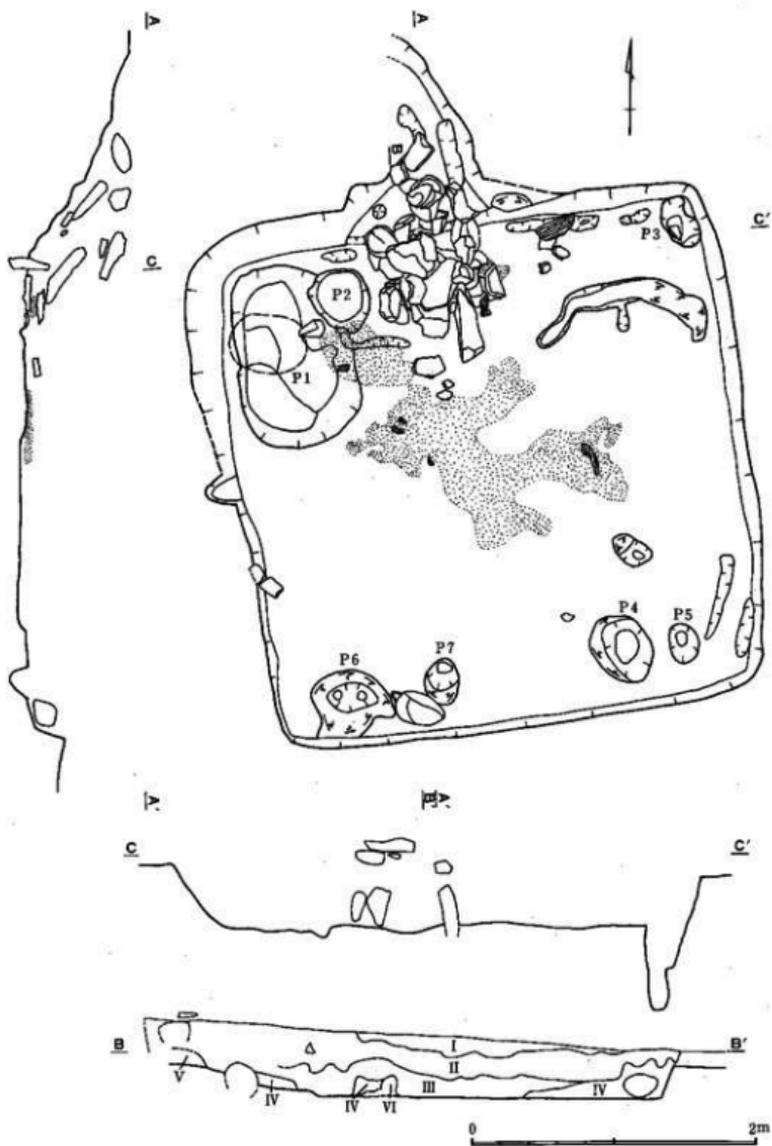
### 調査経過

グリッド調査の段階で、AT-47グリッドにおいてまばらな焼土を検出し、甕の破片(第11図2)を発見したため掘り下げを中止し、周囲の第I層を小形バックホーによって除去した。カマド部分の礫は第I層を除去した段階で露わになってしまった。第II層はほとんど認められない。手堀で遺構の検出を進めたところ、谷部第IV層黒褐色土層上部で、カマドと推定された礫から下方に漆黒色土層(谷部の第III層にごく類似する)が分布し、その範囲が住居址と推定された。しかし、尾根部と谷部の境界のため土層の層相がかなり変化し、また49・50列が畝と近代の溝によって著しく攪乱されていたため、プランの確認は難航した。色調による判別確認は困難なため、最終的に硬度と含有物によって方形を呈する住居址を検出した。

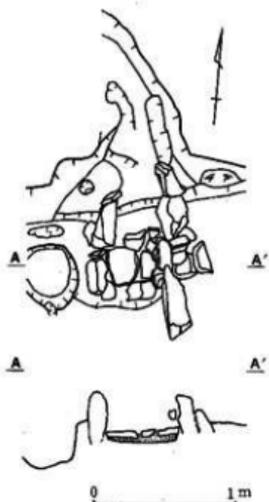
住居址の調査は、ほぼ傾斜方向である南北に土層観察用のベルトを残し、ほぼ床面まで掘り下げた。埴土は自然堆積状態を示し層相は以下の通りである。全体に焼土粒の多いのが特徴である。(図版4-1)

第I層 漆黒色土層 粘りしまり共に無く、谷部基本層序の第III層にきわめて近い。

第II層 暗褐色土層 I層より軟らかい部分と硬い部分とがあり均一ではない。ローム・焼土



第9図 梨の木沢遺跡 第2号住居址実測図 (1/40)



第10図 梨の木沢遺跡 第2号  
住居址カマド (1/40)  
(天井石を除去した状態)

遺物の出土はごく少なく、埋土中から土師器・須恵器等の破片・鉄製品、カマドの内外と柱穴から土師器の破片・鉄製品が出土した。カマド付近の甕は使用時に破損し、そのまま残されていたものと考えられ、ほとんどの家財道具は住居を去る際に持ち去ったものと思われる。

#### 遺 構 (第9図・図版5)

カマドより東側の北壁上部が攪乱のため破壊されていた他は、かなり良好な状態で遺存していた。なお、カマド煙道部の西と西壁の一部はグリッド発掘の際の掘りすぎによるものである。東西南北とも3 m80cmの、ほぼ方形を呈する。壁高は北西隅で53cm・北東隅で32cm・南西隅で22cm・南東隅で24cmを計る。床面は北壁から約1 mまではハードローム層の硬いしっかりした床であり、それより南は漆黒色土層(第III層と同様の層)を床面とし、軟弱である。中央部が浅い皿状に凹む。

住居址の中央部床面上には不定形に焼土が分布していた。あたかも炉内から掻き出したものが集積したような状態であったが、火災による可能性もある。厚さは7.5cmまでである。

柱穴と考えられるものは奥壁側のP1・P3があり、南壁に並ぶP4・P5・P6・P7も可能性がある。P1の掘り方は南北1 m30cm東西80cmあり、深さ21cmと比較的浅いが、中央部には54cm×40cmの柱痕状のピットがあった(図の破線)。その埋土はローム粒・焼土粒・炭粒(2 cmまで)まじりの暗褐色土層で住居址埋土の第II層に類似し、ごく軟らかい。一方、掘り方の埋土は下層からロームまじり明褐色土、ロームブロック、ローム粒混じり黒褐色土、ロームブロック、ローム粒混じり黒褐色土という典型的な互層構造であり、表層はロームブロックまじりの茶

の微粒子を含む。

第III層 暗褐色土層 II層よりやや明るくしまる。焼土粒・木炭粒をII層より多く含む。

第IV層 暗褐色土混じり焼土層 焼土とIII層との混合土。ばろばろする。III層より軟らかい。

第V層 焼土混じり黄褐色土層 カマドの粘土の風化したものであろうか。焼土粒を混える。

第VI層 焼土ブロック しまった焼土塊。一部褐色土含有。

第II層と第III層には図版4-1のような安山岩礫の落込みが十数個みられた。

その後ベルトをはずし、床面から浮いた埋土中の礫を除くと、カマド手前の床面に厚い焼土があたかもカマド内から掻き出したかのように検出された。その後床面を精査し、柱穴及び屋内施設の調査を行った。

遺物の出土はごく少なく、埋土中から土師器・須恵器等の破片・鉄製品、カマドの内外と柱穴から土師器の破片・鉄

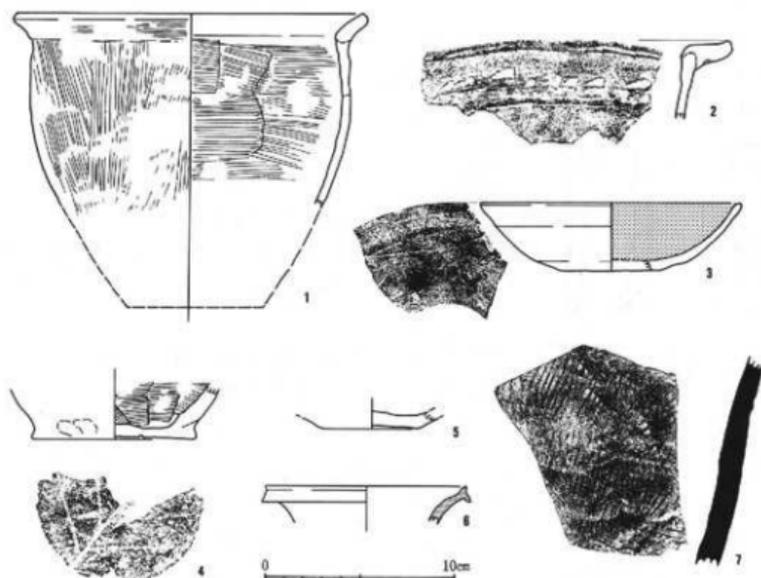
褐色土で張り床としている。P 3は平面形が不定形で小さいが、深さは63cmといちばん深く、壁には棒状のもので削って掘った縦方向の溝が認められた。粘土が中に落ち込んでいた。

P 4は25cm、P 5は15cm、P 6は11cm、P 7は24cmの深さである。周溝が一部に認められたが連続しない。南壁の西側には、壁に接して径36cmの礫が据えつけたかのように置かれてあった。

カマド西のP 2は灰だめの穴と考えられる。埋土は上部がローム粒・焼土・黄褐色粘土まじりの黒褐色土層、下部は明褐色土にローム・焼土・さらさらした黄褐色土を含む。カマドの焚き口から細い溝が続き、焼土が中に落ち込むように検出された。

カマドは石組粘土製カマドであり、北壁のほぼ中央より若干西に築かれている。使用している礫はすべて安山岩である。焚き口幅80cm、焚き口からカマド最奥部まで80cmである。軸石は平板状の角礫と円礫を床面下に埋め込んであり、回りは黄褐色土で固められ、平らな2枚の大きな天井石もほぼ原位置に残っていた(図版6-1)。カマド内は平板状の礫を数個並べて火床部とし、焚き口から約46cmの位置に三角柱の礫を利用した支脚がある(第9・10図・図版6-2)。地下18cm、地上18cmとかなりしっかりと埋め込まれていた。火床部の礫上下それぞれ5cmには焼土が認められた。遺物としては、使用時に破損したと思われる甕の破片が数点検出された。

#### 遺物(第11・12図)



第11図 梨の木沢遺跡 第2号住居址及び周辺グリッド出土遺物(1/3)

土器と鉄製品がある。土器は、破片数はかなり多いが、器形を復元し得るものは少なかった。器種には土師器・須恵器・内黒土器があり、第1号住居址と同様、灰釉陶器はほとんど見ることができない。

土師器には坏・甕がある。坏類は稀少で口縁部小片が若干認められる程度である。甕は特徴的である。第11図1は口径18~20cmのやや小形の甕である。ゆるく張り出す体部から、肥厚された口縁部が強く短く「く」の字に屈曲する。そのため内側に鋭い稜が形成される。外面をタテハケ、内面をヨコハケ調整し口縁部をヨコナデする。

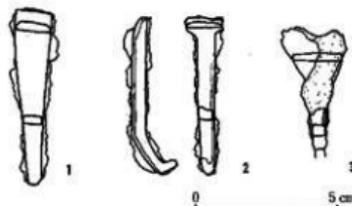
4は1の底部かと思われる。底部外面は広葉樹葉を用いた木葉底である。底径8.6cmを測る。2は口径25~30の大形の甕である。薄手の体部から分厚い口縁が短く「く」の字に屈折してつけられる。内面には強い稜が形成される。口縁部外面にはおそらく調整用具のハケ状板の先端を用いて刺突文をなす。甕類はいずれもていねい、堅緻な作りである。特徴的なのは甕の胎土で、暗茶褐色を呈し、雲母や石英のふぞろいの大きさの砂粒を多量に含み、意識的な混和が想定される。

須恵器は図化しえるものがない。大形の甕破片(7など)の他に壺形土器の小片や、きわめて焼成の甘い坏底破片などを含む。

内黒土器はほとんどが無高台糸切り底の坏である。器形を復元できるものが少ない。3は口径13.9cmの浅い坏である。体部外面に線刻文様を持つ。5は同じタイプの底部であり、見込み目がへそ状に盛り上がる。

第12図1・2は鉄製品である。1はクサビ形をした平板状。P1の柱痕状ピット内から出土した。2は釘形であり、先端が曲がっている。基部は平らである。

AR-AT-47~49グリッド層中検出の遺物は、2号住居址に帰属する可能性が高いものである。



第12図 梨の木沢遺跡 第2号住居址及び周辺グリッド出土鉄器 (1/2)

土師器・須恵器・内黒土器・灰釉陶器がある。灰釉陶器6は口径10~11cmの壺口縁部片である。端部は上下とも鋭く尖る。

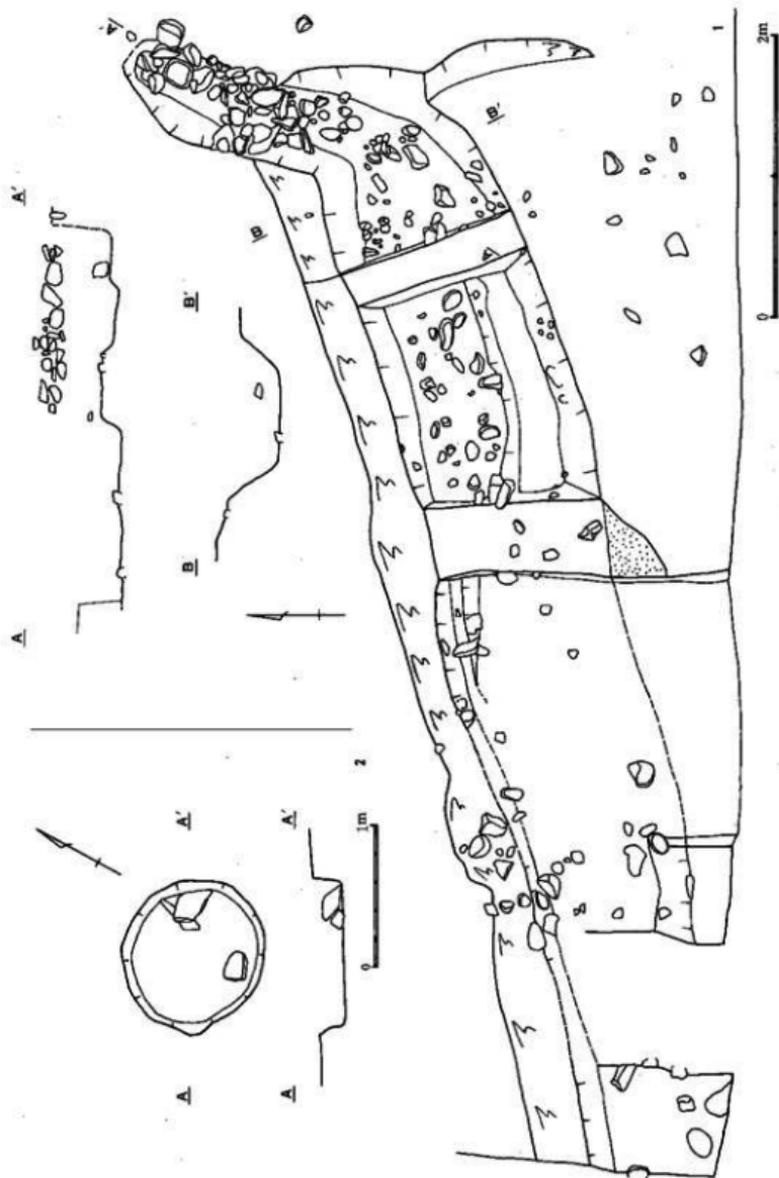
第12図3は鉄鎌である。先端が2又に分れる雁又形。AS-49の攪乱層出土。

### イ溝状遺構

#### 第1号溝址(第13図-1・図版6-3)

第2号住居址のすぐ南に検出された。第2号住居址の埋土である第I層の漆黒色土層を切って構築されていたため、第2号住居址よりは新しい時期のものである。一方、性格不明の焼土がAV-48に認められたが、それも切断していた。東西8mにわたって調査した。

断面は台形で幅約1m60cm、深さ36~45cm、東端は北へ屈折し幅が狭くなって断面がU字形となる。幅60cm深さ45cmである。この部分では礫があたかも組み合わせたかのように検出され、底部から細かい砂が出土した。3本のベルトを残して観察したが、埋土は黒褐色土の均質層で怪



第13図 梨の木沢遺跡 第1号溝基(1)、第1号小竪穴(2)実測図 (1/40)

30cm位までの亜円礫を含む(図示した礫は上層が一部除かれている)。なお、所々に攪乱がおよんでおり、溝の南側はローム層まで攪乱されていた。流水の痕跡を残す砂が検出されたことから、水路状のものと考えられるが、その性格ははっきりしない。

出土遺物は土師器・須恵器・内黒土器・灰釉陶器などの小破片がある。量は少なく、時期は判然としない。

## ウ 小 壑 穴

### 第1号小壑穴(第13図-2)

遺跡の東部尾根上のAJ-95・96グリッドで検出された。平面形はほぼ円形で長軸は1 m10cm、深さは20cm、底部は平らでたらい形の形態である。埋土は自然堆積の状態であった。内部に30cm前後の安山岩礫が3点入っていたほか、人工遺物は発見されなかった。

## エ その他の出土遺物(第14・15図、図版7-2)

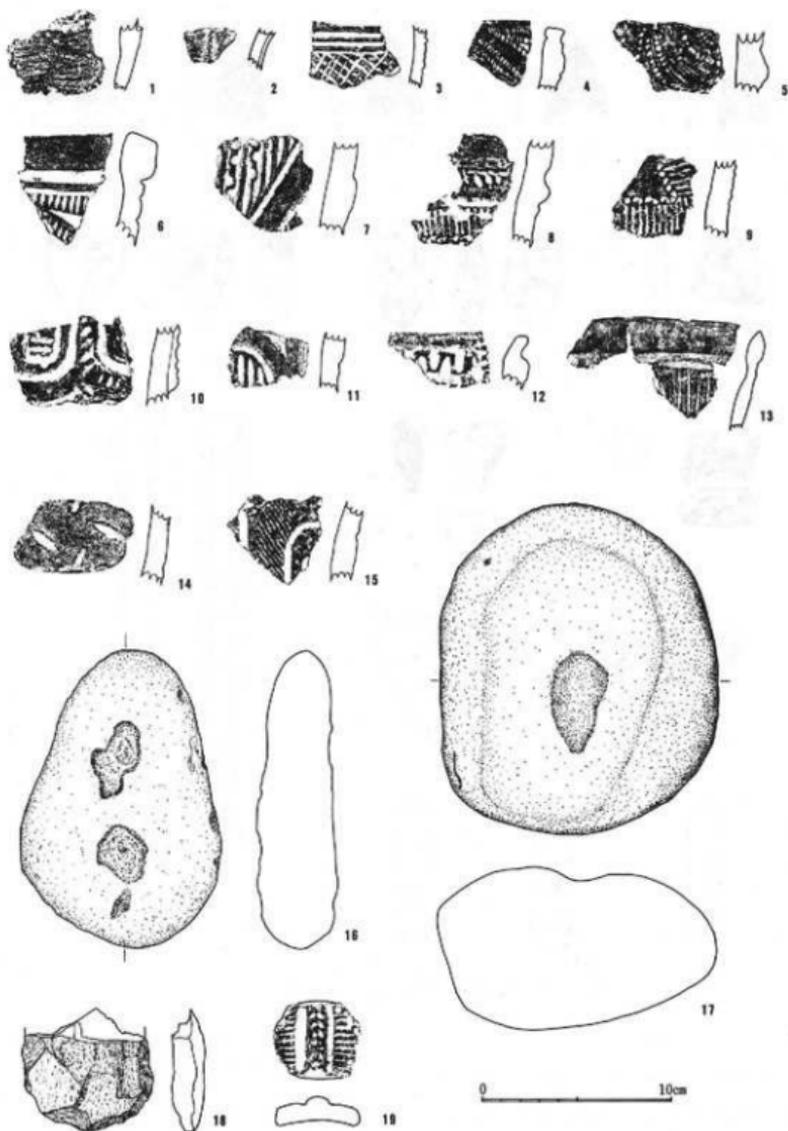
遺構外出土遺物で、代表的なものについて以下に述べたい。

第14図1は東の尾根部BA-95グリッドから出土した。胎土に繊維痕と細かい金雲母を含み、早期の茅山下層式に比定されよう。2はAV-31出土の隆帯を張り付けた破片である。縄文前期中絶式の口縁部に垂下する隆帯と思われるが、破片が小さいため断定できない。

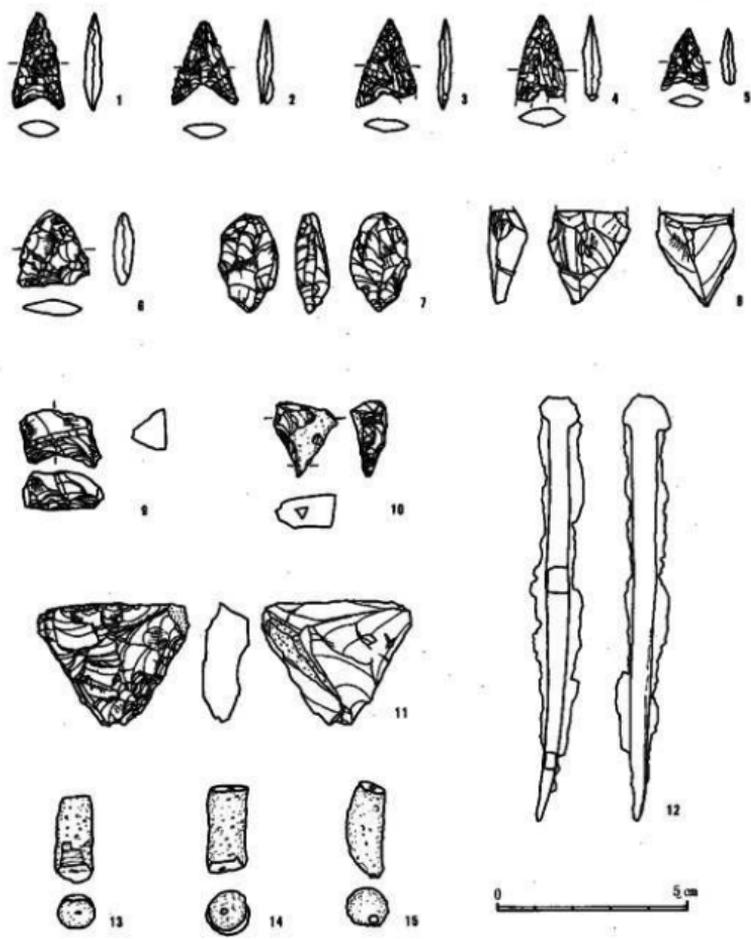
3は縄文時代中期初頭期の胴部破片であろう。4・5は連続する三角押し文を特徴とし、縄文中期中葉新造式と思われる。6~10は藤内式に比定されよう。8・9はキャクピラ状の連続押し文を特徴とする。11・12はこれより新しい井戸尻式期のものであろう。13・14は縄文中期後葉の曾利式土器である。14は最末の曾利V式。15は磨り消し縄文の胴部破片で、沈線の状態から後期初頭と考えられる。3~12・14・15はいずれも住居址の検出された南斜面から出土した。

16・17は輝石安山岩製の凹石である。16は平板状の礫の片面みに敲打凹みが2ヶ所ある。全体に暗赤褐色の酸化鉄が厚く付着している。第2号住居址埋土中から発見された。17は長軸17.5cmを計る大形品である。やはり敲打による凹みを片面に残す表面採集資料。なお図示できなかったが、この他にもう1点欠損品が出土している。18はAS-62から出土した「打製石斧」刃部破片。硬砂岩製である。19はの8・9と同じ藤内式土器破片であるが、形態から土製円盤と捉えておきたい。周囲を円盤状に調整している。なお研磨はおこなわれていない。AR-49出土。

第15図1~6は石鏃である。4以外は半透明の黒曜石製。4はAS-53の第II層出土の白緑色チャート製である。3・4・6は主要剥離面を残す。7は半透明黒曜石製のピエス・エスキューである。8はブランディング状の急角度剥離の施された石器である。先端部が欠損している。珪質頁岩製。9はノッチドスクレイパーである。半透明黒曜石製。10はAT-56のII層出土の玉髓製石鏃。先端部断面は三角形を呈する。8・9・10ともに住居址の検出された南向き斜面から出土した。調整が縄文時代的ではなく、旧石器時代の所産とも考えられる。11は上方と右下からの剥離



第14図 梨の木沢遺跡 遺構外出土遺物 (1/3)



第15図 梨の木沢遺跡 遺構外出土遺物 (2/3)

の顕著な三角形を呈する石核状の石器である。珪質頁岩製。

12は鉄器である。角釘状で腐食が著しい。AS-53のII層出土。時期は不明である。

13~15は自然遺物である。褐鉄鉱の一種で「高師小僧」と呼ばれ、植物の根などに酸化鉄が沈澱したものである。いずれも BM-67グリッドの第III層類似層から出土した。14と15の穴は貫通

している。

図版7-2は磁器である。いずれも近代(明治・大正時代)の所産と思われる。1・3は飯茶碗、2は手塩皿でいずれも微塵文の型紙染付を特徴とする。1と3には環珞文がみられる。4・5は飯茶碗と思われるが、青と緑の手書き縦線文である。6は厚い口縁の鉢である。手書き文。7も同様手書きである。8は小片であるが、銅版転写の菊唐草文である。9も同様銅版転写による。4と5の緑以外はコバルトによる青色(紺色)を呈する。すべて第2号住居址検出地区と53列から出土した。これら以外にも江戸時代末と思われる小破片が出土している。

### (5) 放射性炭素年代測定の結果

第2号住居址内の3ヶ所から良好な状態で出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行った。結果は下記の通りである。

<u>Code No.</u>	<u>試料</u>	<u>年代(1950年よりの年数)</u>
GaK-14877	Charcoal from 梨の木沢遺跡 No.1 2号住 890918	1480±80 A.D.470
GaK-14878	Charcoal from 梨の木沢遺跡 No.2 2号住 890913	1490±100 A.D.460
GaK-14879	Charcoal from 梨の木沢遺跡 No.3 2号住 890912	1280±70 A.D.670

なお、年代値の算出には $^{14}\text{C}$ の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。また付記した誤差は $\beta$ 線の計測値の標準偏差 $\sigma$ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代である。また試料の $\beta$ 線計数率と自然計数率の差が $2\sigma$ 以下のときには、 $3\sigma$ に相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してある。また試料の $\beta$ 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が $2\sigma$ 以下のときには、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記してある。

以上の記述は、バリノ・サーヴェイ師作成の「御射山地区発掘調査試料 $^{14}\text{C}$ 年代測定報告」(年代測定は学習院大学木越邦彦氏)を編集者の責任において抜粋したものである。

## (6) ま と め

1. 今回検出された平安時代の2軒の住居址は、遺物等からみて同時期と考えられる。少ない遺物から、だいたいの傾向をつかんでみると、①食器類に占める黒色土器と土師器の割合が多く、特に第2号住居址は黒色土器がほとんどである。②灰釉陶器はあまり見られず、壺などの器形が見られるのみである。③須恵器は破片の量はかなり多く、壺・甕などの貯蔵具がほとんどである。という点に要約されよう。以上のような点からも、総合すると2件の住居址の時期は土器からは10世紀前後と考えるのが妥当かと思われる。放射性炭素年代測定については、謙虚に受けとめるべきものだが、A.D.460~670年(古墳時代~飛鳥時代)というかなり古い測定結果が出てしまった。遺物・遺構等から考えてそこまで遡らせることはむずかしく、サンプル採取時の問題、あるいは新しい時期の測定値であること( $^{14}\text{C}$ 年代は新しい時期の測定値ほど古く出る傾向にある)などいくつかの原因が考えられる。いずれにせよ、サンプルとした炭化材は第2号住居址に伴うものであることはまず間違いないため、今後同時期の $^{14}\text{C}$ 年代測定を行う際の参考となればと思う。

さて、八ヶ岳西南麓の開発は後行する折戸53号窠期に画期があることが指摘されているが(注)、本遺跡の住居址はこれに先行する資料として注目すべきと思われる。同時に第2号住居址の土器に山梨県的な要素の認められるのも注目される。

注：笹沢 浩 1988 「4古代の土器」『長野県史考古資料編 全1巻(4)遺構・遺物』 長野県史刊行会

2. 梨の木沢遺跡は、今回の調査遺跡の中では最も範囲が広く、また古くから知られていた遺跡でもあり、遺構の発見が期待されたが、歴史的環境の項で述べたように極めて保存状態が悪く、ほとんどが破壊されているのではないかという懸念も一方にあった。しかし結果として平安時代の2軒の住居址と、溝址を検出する事ができ、しかも第2号住居址は擾乱の影響をあまり受けていなかった。また、点数的には少なかったが、縄文時代早期・中期(前半~後半)・後期と近世から近代(江戸末・明治・大正)の遺物を発見し、梨の木沢遺跡が長い期間にわたって人々の生活の舞台となった複合遺跡であることが明らかとなった。

平安時代の住居址の検出された南斜面は、現況ではあまりはっきりしないものの、褐色土層あるいはローム層面で見ると、日溜り状のなだらかな凹地であったことがわかった。そして第2号住居址は、その凹地の一番西に位置する住居だったことになる。一方の東側はグリッド発掘でも遺構は検出できず、また農道で切られているため不明であるが、第1号住居址と第2号住居址の間は約20m離れており、53列にトレンチを入れて調査したものの、先述した2本の溝や畝による破壊が著しいため遺構を検出することができなかった経緯がある。須恵器等の遺物の発見もあり、この地点に住居址が存在した可能性も捨てきれない。幸いにして発見された2軒は、一つの集落を構成することが充分考えられる。また、遺跡全体にグリッドを設けて調査した結果からみて、歴史的環境の項で触れた「原村教育委員会に保管されている大甕」は、第1号住居址を含む擾乱の

著しいこの地区から出土した可能性が高い。攪乱と捉えた2本の溝との関係も考えられるところである。

一方縄文時代については、藤内式期の遺物が第1・2号住居址の検出地区から発見されている。概期の集落は、平安時代の集落よりも尾根の高い位置にあるのが通例であり、土取りによって破壊された部分に居住地があった可能性を推測しておきたい。

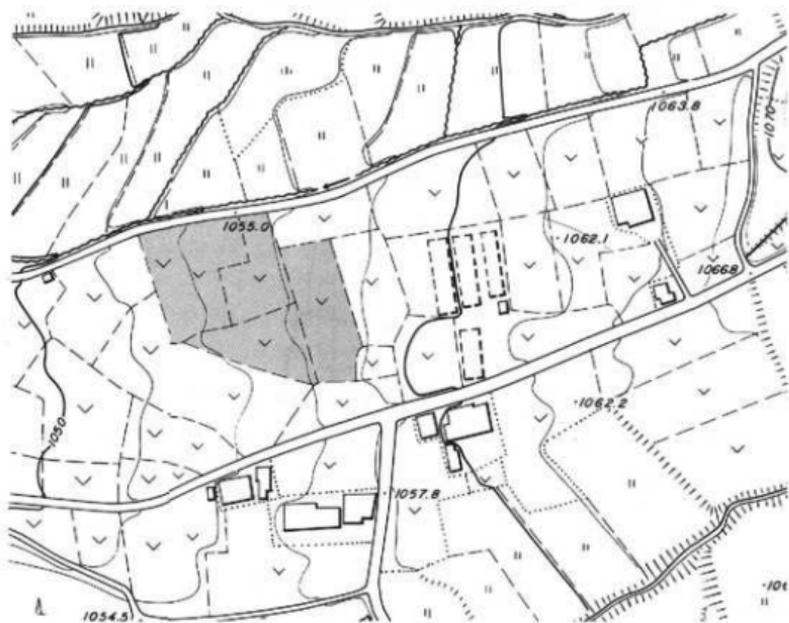
## 2 中道通遺跡

### (1) 調査経過

1989 (平成元) 年

6月20日 機材搬入・テント設置の後、グリッドの設定を行い、BY列のグリッドから調査を開始する。BY-35・36グリッドにおいて2箇所小竪穴状の落ちこみを確認する。

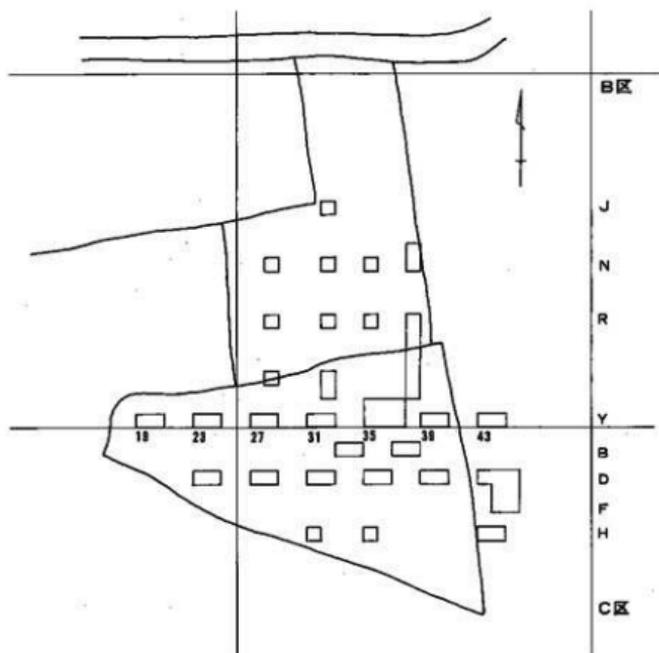
6月21日 38列・CD列とBY-35・36拡張区等において遺構確認作業他。遺跡の西北部では、



第16図 中道通遺跡 発掘区域図 (1/2,500)

重機による表土除去作業を始める。

- 6月22日 BR~BW-38の埋没河川による多数の礫検出作業他。CD-44において焼土が検出されたため、拡張して遺構の可能性を探る。昨日同様遺跡の西北部において、重機による表土除去作業を行うが、埋没河川によると思われる礫が多数出土し、遺構等は検出されない。
- 6月26日 CD-43・44拡張区の南東部に埋没河川によると思われる黒色土が現われる（図版9-2）。サブトレンチを設け、下層の確認を始める。地主の話などから焼土は現代のものとは判断される
- 6月29日 CD-43・44拡張区サブトレンチの自然礫検出作業他。CH-43・44からも同様の礫検出。BY-35・36で確認した小竪穴状遺構の調査を始める。
- 6月30日 第1・2・3号小竪穴の調査他。CD-43・44拡張区サブトレンチの礫を除き、下層（第IV層）の確認。BN・BM-38の掘り下げ。礫の間から縄文時代中期曾利式の土器が数点出土。
- 7月4日 第1・2・3号小竪穴の調査他。BN・BM-38の精査。



第17図 中道遺跡 グリッド配置図 (1/800)

7月5日 第1・2・3号小竅穴の写真撮影・実測他を行う。BN・BM-38の精査。BN-32は礫を除き、ハードローム層まで深堀する。

7月7日 BN-35、BR-35他、残ったグリッドの調査を終了し、機材・テントの移動を行う。

## (2) 遺跡の位置と環境

### ア 遺跡の位置と環境 (第2・3・16図、第1表)

中道通遺跡は、長野県諏訪郡原村13886番地付近に位置する。標高は1,055m前後を測る。中新田区の西部にあたり、主要地方道茅野・小瀬沢・葦崎線から750mの位置にある。地目は普通畑である。

地形的には北の道祖神川と南の柳林川にはさまれた平坦な尾根中央にある。微地形的には遺跡の中心部がやや小高い尾根上になるものの、降雨の際には縦横に水が流れるような場所である。

遺跡の発見は1984年度に行った分布調査であり、縄文時代と思われる無文土器片を1点採集している。また1988年度にも踏査が行われているが、遺物を発見できず、「縄文時代の遺物散布地と考えた。」とある。

### イ 層 序

CA・CB・CC列はやや小高い尾根にあたり、13~21cmの第I層(耕作土層)下は、すぐにハードローム層になる。また第I層下がソフトローム層になる地点もあり、土層の保存状態は良くない。ここでは尾根両側の浅い谷部の一般的な層序について記す。

第I層 明褐色土層 畑の耕作土層。石灰の白い粒を含む。層厚15~21cm。

第II層 漆黒色土層 しまりは良好。炭粒を含むグリッドがある。この層の下部には、こぼし大から40cm位までの安山岩の亜円礫・亜角礫が含まれる。層厚5~24cm。

第III層 黒色土層 しまり良く、やや堅い。第II層よりも礫を大量に含み、また平均的にみて層が厚い。礫の種類は第II層と同様だが、2~15cm位の小円礫を含むグリッドもある(CH-43・44)。層厚は20~30cm。

第IV層 黄褐色土層 いわゆるソフトローム層にあたる。色調は汚れた感じで礫を多く含む。層厚5~10cm。この下はハードローム層となる。

### (3) 調査の方法と概要 (第17図)

調査は、まず小尾根の中心部に東西南北方向(磁北による)に十文字のラインを設定した。南北方向はこの基準線からそれぞれ50mの大区分を設け、北をB区、南をC区とした。さらにその大区分の中を2mの小区分に分け、北からアルファベットのAからY(50区分)までを振った。東西方向は大区分を設けず、南北の基準線を境に2mの小区分に勾切り、西に20・19・18と小さく、東に21・22・23と大きくなるよう名付けた。これによって遺跡全体に2m×2mのグリッドが設定されたことになり、各グリッドは①南北の大区分、②南北の小区分、③東西の小区分の順に表記することで特定した(例:BY-44)。また、南北のグリッド列については「38列」のように、東西の列については「CB列」というように称している。なお東西方向のラインは、遺跡の中心にあたるなだらかな小尾根の長軸方向にほぼ一致している。

調査は、最初に尾根の中心にあたるBY列を4m間隔で2m×4mのグリッドを手掘り掘り下げ、次に直交する38列・44列を掘り下げた。層位的には原則として第IV層上面までとしたが、自然礫の多い谷部については第III層までで調査を中止したグリッドもある。また、遺構等の埋没が予想された段階で発掘区を拡張した。手掘りで調査した面積は61グリッド約244m<sup>2</sup>である。一方、抜根によって一部破壊されていた西北部については、重機で表土を除去し調査したが、遺物遺構等は発見できなかった。

### (4) 遺構と遺物

#### ア 小 竪 穴 (第18図、図版10-1)

##### 第1号小竪穴

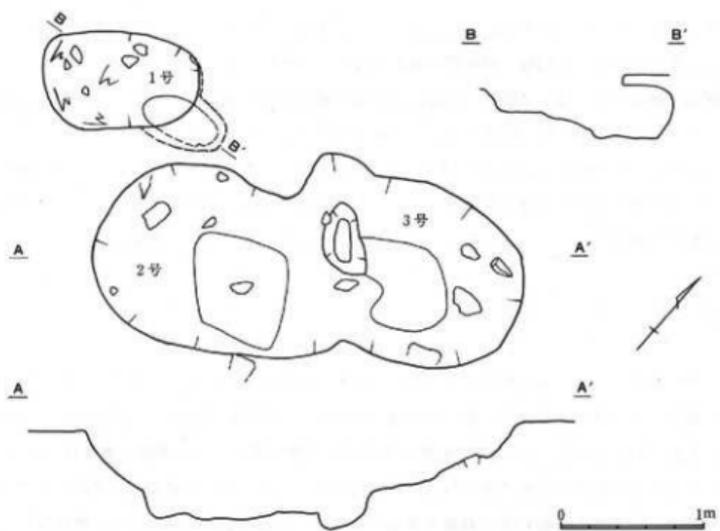
小さな小竪穴である。上場の長径は1m10cmであるが、東方に30cm程袋状となる。埋土は中央部が混ローム暗褐色土、壁ざわは混ローム明褐色土である。内部から遺物の出土はなかった。

##### 第2・3号小竪穴

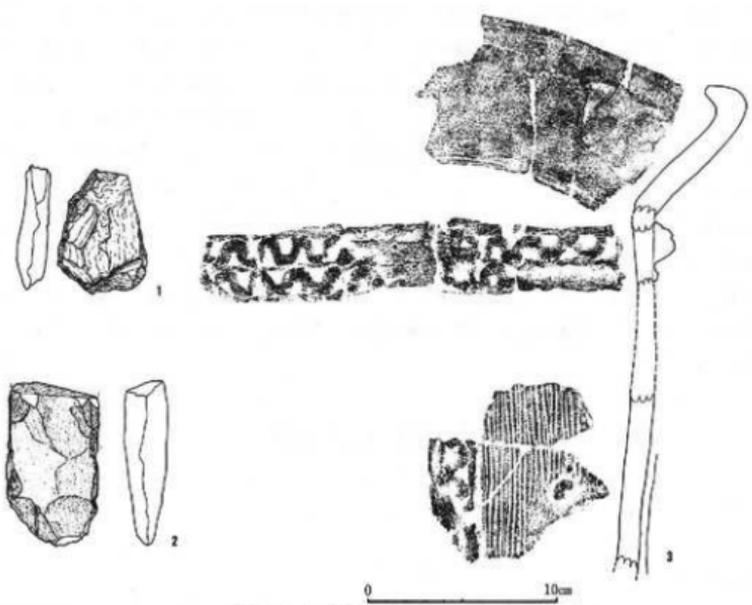
2基が重複している。検出時の平面プランからも土層の断面からも新旧関係は判然としなかった。短径はそれぞれ1m30cm、深さ50~60cmを測る。底部は楕形である。ところどころ自然礫がソフトローム層中からのぞいている。埋土はレンズ状の自然堆積状態を示す。上から混ローム粒褐色土層(約30cm)、黒褐色土層(約20cm)、褐色土層(約10cm)の3層に区分される。小竪穴内部から人工遺物の出土はなかった。

##### イ その他の出土遺物 (第19図)

BM-N-38グリッドから第19図3の縄文時代中期の一括土器が出土した。出土層は多量の礫のわずかな空間に堆積した第II層の漆黒色土層である。遺構に伴うものではなく、また埋納ある



第18图 中道通遺跡 第1・2・3号小竈穴実測図 (1/40)



第19图 中道通遺跡 出土遺物 (1/3)

いは据えられたといった出土状態ではなかったが、流れてきたものではない。礫は他のグリッドで検出されているものと同様、河床礫と判断される(図版10-2)。

口縁部が無文でらっぱ形に開き、頸部には波状の粘土紐を2条貼りつけている。胴部は地文を条線とし、垂下する粘土紐の隆帯を付す。曾利I式に比定されようか。

第19図1・2はいわゆる打製石斧である。2は表面採集、1はBY-36グリッドの第I層から出土した。2は硬砂岩製で基部を欠損する。背面は自然面である。1は幾分ホルンフェルス化した粘板岩製で小銀状のコンパクトな製品である。刃部はあまり鋭くない。腹面を図示した。

### (5) ま と め

このたびの調査では、ある程度予測していたことであるが、遺構遺物の発見は少なかった。しかし、耕作による攪乱を受けていない第II層の礫中から一括土器を発見し「打製石斧」を2点(第I層と表採)得たことは、この遺跡の性格を考える上で興味深い。この遺跡は集落跡ではないが、当時のなんらかの生活の場所であったことが明らかとなった。これに類似した遺跡として、縄文時代後期の一括土器と打製石斧・石鏃を単独で発見した花表原遺跡の例があり、興味深い。

一方、地理的な面では以下のような所見が得られたのでまとめておきたい。本遺跡に似た地形は当地にはごく一般的であり、その成因や古地形を推定する際の参考になるかと思われる。

BR-W-38グリッドでは南の尾根部に礫はほとんどなく、谷斜面からは夥しい量の礫が検出された。しかもその礫は南東方向から北西方向に瓦を重ねたように斜倒し状に並び、覆瓦状の構造が認められた(図版9-1)。このことから、かつてこの方向の水流があり、礫が押し出され堆積したことが推定された。また、礫が人工的な配置によるものかどうかの判断材料の一つとする事もできた。

覆瓦状の構造は、CH-43・44という尾根の反対側でも若干認められ、その方向は北東から南西方向である。

現状の地形は平坦でなだらかな傾斜を持っているが、第II層の漆黒色土層が堆積していた当時は中小の河川がかなり自由に流れ大礫や巨礫が露出し、現状とはかなり景観が異なっていたことであろう。

## 3 御射山沢遺跡

### (1) 調査経過

1989(平成元)年

7月7日 機材の搬入とテントの設営を行なった後、調査予定地の草刈とグリッド設定を始め

る。

- 7月10日 BY-76・77、BY-81・82グリッドから調査を開始する。午前中で作業を中止する。
- 7月11日 午前中グリッド設定。午後はBY列のグリッド他の調査。BY-76・77は礫を除き、ソフトローム層まで確認する。
- 7月14日 BY列・CH列西方・76列の調査。遺跡の西部にて、重機による表土除去作業を始める。自然礫と思われる多量の大小礫を検出する。
- 7月15日 CH列西方他の調査。本日までいずれのグリッドでも、過去の氾濫によると思われる大小の自然礫が検出される。CH-42で埋没河川を検出。遺跡の北方部は調査前に樹木の伐採・抜根で一部破壊されており、面積も広大なため、昨日に引き続き、重機による表土除去作業を行うこととする。
- 7月18日 BY列・B区北東部他の調査。遺跡北部の重機による表土除去作業。
- 7月19日 遺跡北部の重機による表土除去作業。昨日重機で表土を除去した部分において手作業による遺構・遺物等の有無の確認。全体に巨礫が多く、人為的な痕跡は一切確認できなかった。その他グリッド調査。
- 7月20日 B区北方・東部部の調査。遺跡北部の重機による表土除去作業。遺構等は検出されなかった。
- 7月21日 B区・C区の調査。
- 7月22日 C区の西方部調査。
- 7月24日 C区の西方部調査。
- 7月25日 C区の西方部最終の調査。クイ抜き。

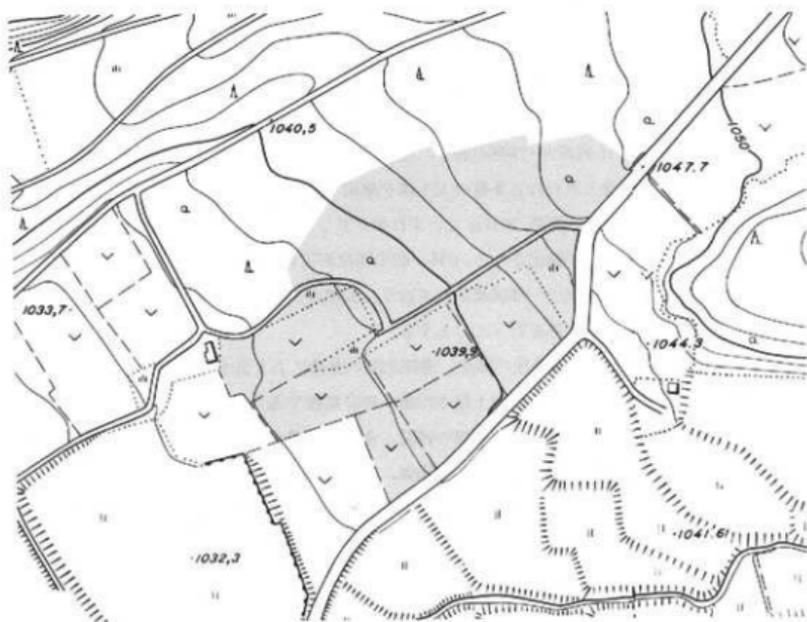
## (2) 遺跡の位置と環境

### ア 遺跡の位置と環境(第2・3・20図、第1表)

御射山沢遺跡は、長野県諏訪郡原村14655番地付近に位置する。標高は1,039m前後を測る。中新田区の南西部にあたり、主要地方道茅野・小淵沢・重崎線から900mの位置にある。地目は普通畑と山林である。

地形的には北の六部塚川と南の稗田川はさまれ、南に向かって全体がぐだり傾斜する尾根(梨の木沢遺跡・梨の木沢西遺跡と同じ尾根上)にある。六部塚川寄りには川の際までのぼり傾斜で、川に6~7mの比高差ですとんと落ちる。

遺跡の発見は1984年度に行われた分布調査であり、縄文時代と思われる土器片を2点と内耳土器片1点を採集している。また1988年度にも踏査が行われ、「縄文時代の土器破片2点と中世の内耳土器破片1点を発見した。」とある。

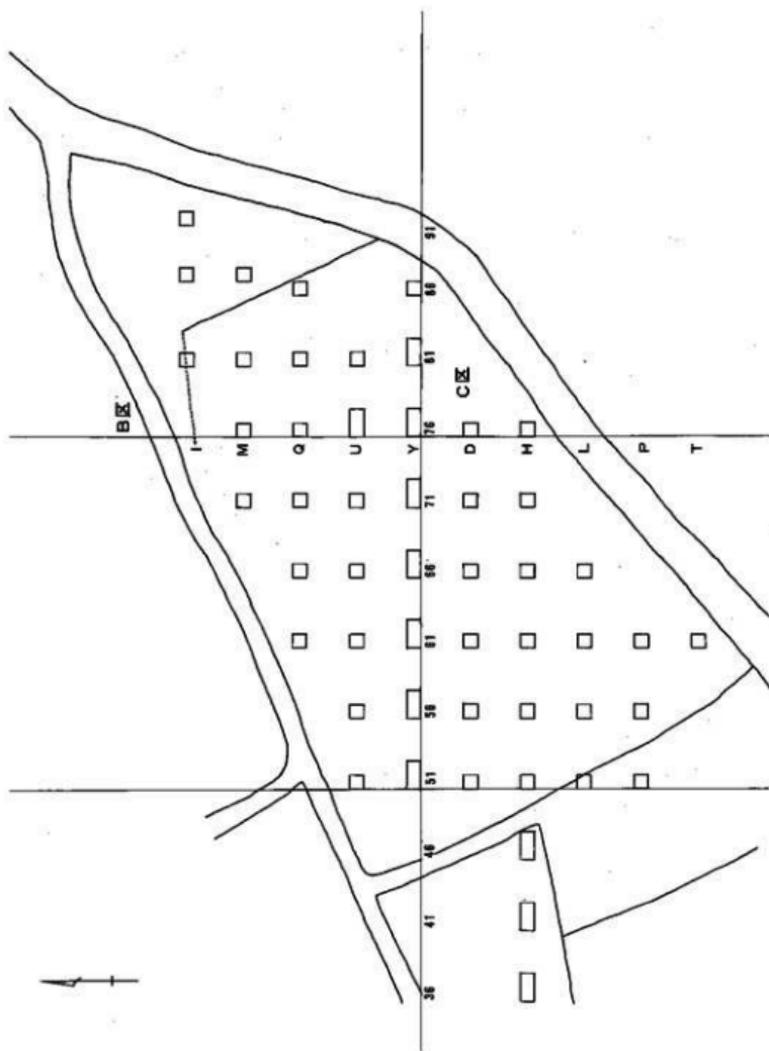


第20図 御射山沢遺跡 発掘区域図 (1/2,500)

### イ 層 序 (図版12-1)

基本的な層序と観察記録を記す。

- 第 I a 層 茶褐色土層 ロームブロック・石灰を含む客土 (現耕作土層)。層厚14~25cm。
- 第 I b 層 黒色土層 石灰を含み、しまり粘性ともない旧耕作土層。第II層を削る。層厚5~15cm。
- 第 II 層 漆黒色土層 第 I b 層よりさらに黒味が強く、しまり良く粘性は中。礫はあまり含まない。層厚8~10cm。
- 第 III 層 褐色土層 しまり粘性ともに良く、2~20cm (時に50cm) 位までの安山岩の亜円礫・亜角礫を大量に含む。礫の形態や量はグリッドによって変異が大きいの。第IV層とは波状に接する。層厚25~40cm。
- 第 IV 層 いわゆるソフトローム層。第III層と同様の礫を含む。



第21図 御射山沢遺跡 グリッド配置図 (1/800)

### (3) 調査の方法と概要 (第21図)

遺跡南部の畑については手堀で行うこととし、農道北の山林についてはすでに一部抜根等で破壊されており、遺構等の存在が予想されなかったため、広い範囲を重機によって表土を剥いで調査することとした。遺跡西方の一部も同様に重機を使用した。この地区からは遺物遺構等の発見はなかった。

手堀で調査する地区は、中心部に東西南北方向(磁北による)に十文字のラインを設定した。南北方向はこの基準線からそれぞれ50mの大区分を設け、北をB区、南をC区とした。さらにその大区分の中を2mの小区分に分け、北からアルファベットのAからY(50区分)までを振った。東西方向は大区分を設けず、南北の基準線を境に2mの小区分に句切り、西に75・74・73と小さく、東に76・77・78と大きくなるよう名付けた。これによって遺跡全体に2m×2mのグリッドが設定されたことになり、各グリッドは①南北の大区分、②南北の小区分、③東西の小区分の順に表記することで特定できる(例:BM-76)。また、南北のグリッド列については「76列」のように、東西の列については「BY列」というように称している。なお東西方向のラインは、尾根の長軸方向とは30度ほど北にずれている。調査は、最初に中心にあたるBY列とCH列を6m間隔で2m×4mのグリッドと、直交する76列のグリッドを掘り下げ、古地形の概略をあらかじめ確認した後その他のグリッドの調査に入った。層位的には原則として第IV層上面までとしたが、多量の自然礫が出土するため第III層までで調査を中止したグリッドもある。

手堀りで調査した面積は62グリッド約248m<sup>2</sup>である。

### (4) ま と め

遺跡中央部を農道が東西に走るが、それより北は山林で、昔から地元で「どろべーし」(ドロ林)と呼ばれていたという。「ドロ林」というのはドロノキ(ヤナギ科の落葉高木)の茂る林のことかと思われるが確認はしていない。しかし、いずれにせよこの場所は水はけの悪い湿った土地であり、集落等が営まれるには不向きな場所だったようである。今回の調査では遺構・遺物ともに発見することはできず、CH-42グリッド(図版12-2)やCH-46・47などで埋没谷を検出した。CH-42のそれは南南西に流れていたと思われ、下部は砂質土で水がにじみ出てたまるような状況であった。今でも暗渠の様な役割を果たしているものであろう。流れの方向は場所によって一定ではなかったようであり、中道通遺跡と同様小河川が氾濫を繰り返し、現況とはかなり景観が異なっていただろう。

## 4 梨の木沢西遺跡

### (1) 調査経過

1989 (平成元) 年

- 7月26日 グリッド設定を始めるが、まだキャベツの収穫を行っているため、発掘を開始する。AY-16・17グリッドからは、御射山沢遺跡同様の大礫・巨礫が一面に検出される。
- 7月28日 グリッド設定。AY-16・17及びB区のグリッドの調査。AY-16・17では2箇所まで割石と、ハードローム層に達する穴が検出されたが、これは地主が石工を頼んで削ったものとわかる。
- 7月31日 A区・B区の調査。AY-17の礫を除去し、ソフトローム層下部まで確認。いずれの層準にも生活面らしいものは認められず、礫が絶え間なく重積している。
- 8月2日 A区の調査。AQ-26のII層から焼土の散布がみられる。
- 8月3日 AQ-26の焼土は壑穴に伴うもので、埋土の状態から炭焼き穴状の新しい時代の遺構と判断した。
- 8月4日 A区・B区最終調査。クイ抜き・機材の片付けを行い、午前中で作業を終了し、午後は梨の木沢遺跡のグリッド設定を行う。

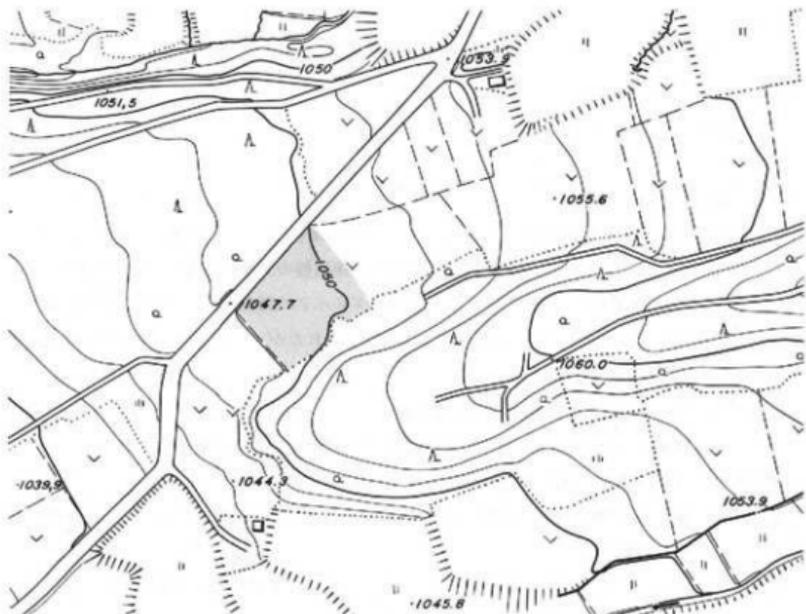
### (2) 遺跡の位置と環境

#### ア 遺跡の位置と環境 (第2・3・22図、第1表)

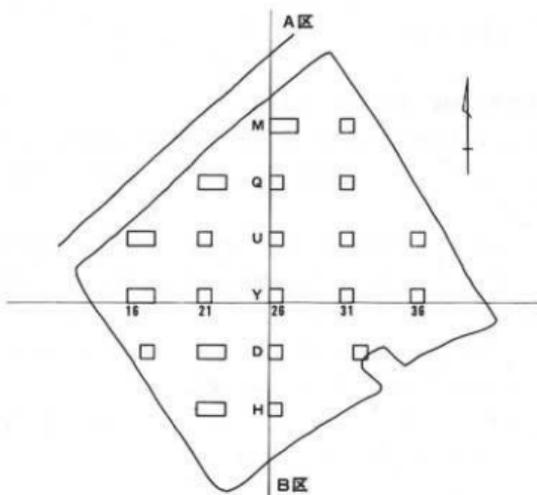
梨の木沢西遺跡は、長野県諏訪郡原村14895番地1・14899番地1に位置する。標高は1,047m前後を測る。中新田区の南西部にあたり、主要地方道茅野・小淵沢・韭崎線から800mの位置にある。地目は普通畑である。

地形的には北の六部塚川と南の稗田川はさまれる幅300mのかなり広い尾根(梨の木沢遺跡・御射山沢遺跡と同じ尾根)にあり、遺跡のすぐ南は比高差約5mの細長い瘦せ尾根となる。日当りは悪く居住環境としては良くない。

遺跡の発見は1984年度に行われた分布調査であり、無文土器(縄文?)口縁部を1点採集している。また1988年度にも踏査が行われているが遺物の発見はなく、そのなかで「昭和59年度発見土器は、無文土器縄文(?)となっているが、胎土・焼成をみれば内耳土器と思われる。」と記され、本遺跡を「中世の散布地と考えた。」とある。



第22図 梨の木沢西遺跡 発掘区域図 (1/2,500)



第23図 梨の木沢西遺跡 グリッド配置図 (1/800)

## イ 層 序

AU-16・17のように耕作土層からすぐソフトローム層になるグリッドもあるが、全体的には以下のような層序を基本とする。

- 第I層 暗褐色土層 粘性低くしまりあり、堅さ普通。耕作土層。層厚15～20cm。
- 第II層 黒色土層 第I層より粘性・しまりあり、軟らかい。下面は凹凸が著しい。第III層の礫が顔をのぞかせる。御射山沢遺跡でみられたような漆黒色土層はない（谷部ではないため）。層厚は10～30cm。
- 第III層 褐色土層 第II層より粘性・しまり・堅さともに無い。こぶし大から径70cm位までの安山岩の亜円礫・亜角礫を大量に含む。層厚10～30cm。
- 第IV層 ソフトローム層 第III層と同様の礫を含む。

### (3) 調査の方法と概要 (第23図)

中心部に東西南北方向（磁北による）に十文字のラインを設定した。南北方向はこの基準線からそれぞれ50mの大区分を設け、北をA区、南をB区とした。さらにその大区分の中を2mの小区分に分け、北からアルファベットのAからY（50区分）までを振った。東西方向は大区分を設けず、南北の基準線を境に2mの小区分に句切り、西に20・19・18と小さく、東に21・22・23と大きくなるよう振った。これによって遺跡全体に2m×2mのグリッドが設定されたことになり、各グリッドは①南北の大区分、②南北の小区分、③東西の小区分の順に表記することで特定できる（例：BD-17）。また、南北のグリッド列については「31列」のように、東西の列については「BU列」というように称する。

遺跡の範囲が狭いため、2m×2mあるいは2m×4mのグリッドを6mあるいは8m間隔で任意に調査した。原則として第IV層まで調査したが、巨礫の出土するグリッドでは第III層までとしたところもある。

調査面積は27グリッド約108m<sup>2</sup>である。

### (4) ま と め

今回の調査では、遺物・遺構等を発見することはできなかった。とにかく礫が多く、第III層に含まれ第II層に顔を出すもの、第IV層に含まれるもの、ハードローム層に食い込むものがあり、いずれの層準にも生活面らしいものは認められなかった（図版14-2）。

なおせまい範囲ではあったが、微地形的にみると北の道沿いはやや尾根状に小高く、南に接する現在の瘦せ尾根側が浅い谷になっていたことがわかった。しかも尾根斜面はかなり入り組んでいたようである。また、南に寄るほど第II・III層が厚くなり、また礫も大きくなる。BH-21・22

グリッドでは径10cm 位までの円礫や砂が堆積している箇所が認められた。

畑の地主も礫には手を焼いたらしく、石工を頼んで大きな石を切り出したという。発掘区からもその際のものと思われる割石の破片や、掘り出した穴の跡が何箇所か検出された（図版14-1 手前左の穴）。

### III 結 語

このたびの調査は、当初から大規模な集落跡の存在が予想されたものではなかったが、各遺跡の項で述べてきたように、一定の成果を納めることができた。調査には全力を尽くしたつもりであるが、調査した遺跡と古来の地形はすべて消滅し、もはやこの地上には存在しない。責任の重大さを痛感するものである。

調査中には村のお年寄りが何人か遺跡の見学にみえた。梨の木沢遺跡にみえたお一人は「自分が何十年も親しんできた、この土地を最後に一度この目で見ておきたかった。」と、いつまでも尾根にたたずんでおられた。

最後に、このたびの発掘調査にあたりお世話になった関係者各位、そして調査に携わっていただいた方々に厚くお礼申し上げる。

#### 参考引用文献

- 原村教育委員会 1985 『花鳥原・中御射山西・中御射山東遺跡 一 県営畑地帯総合土地改良事業御射山地区埋蔵文化財包蔵地緊急試掘調査報告書一』
- 原村役場 1985 『原村誌 上巻』
- 長野県史刊行会 1988 『長野県史 考古資料編 全1巻(4)遺構・遺物』
- 原村教育委員会 1988 『昭和64年度県営畑地帯総合土地改良事業御射山地区内の踏査報告書 梨の木沢・御射山沢・梨の木沢西・中道通遺跡』

#### 調査組織

##### 発掘調査団名簿

- |       |  |
|-------|--|
| 団長    | 平林太尾 (原村教育委員会教育長)  |
| 調査担当者 | 五味一郎 (原村教育委員会)   |
| 調査員   | 伊藤 証 (原村教育委員会)   |
| 調査補助員 | 井上智恵子  |
| 調査参加者 | 中村美子・伊藤竹子・菊池利光・牛山雪子・五味としゑ・五味 清・小林静子・宮坂とし子・藤原智恵子・平林とし美・長田秋子・五味けさき・中村よしの・菊池 透・平出みづほ・中村すずみ・小松住子 (順不同) |
| 事務局   | 行田竹輝 (教育次長)・武田伊都子 (庶務係長)・大口美代子 (主任)・平出一治・宮坂道彦  |

写 真 图 版



1 遺跡の航空写真(左から、中道通・梨の木沢・梨の木沢西・御射山沢各遺跡)左側が北



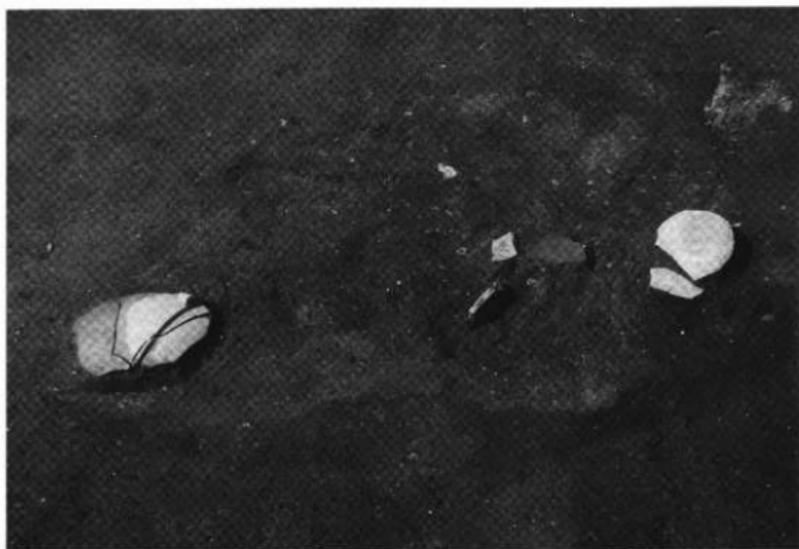
1 遺跡近景（北東に北八ヶ岳をのぞむ）



2 調査状況（63列）



1 第1号住居址全景（南から）



2 四耳壺・坏出土状態（第1号住居址）



1 裸出土状態と土層堆積状態（第2号住居址）



2 床面上の焼土の広がり（第2号住居址 西北から）



1 第2号住居址全景（南から）



2 第2号住居址全景（東から）



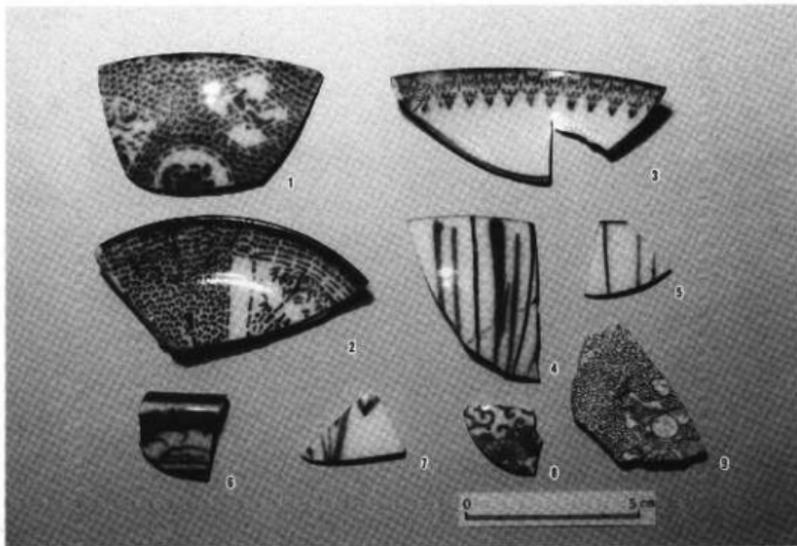
1・2 カマド検出状況 (第2号住居址)



3 第1号溝址(東から)



1 第1号溝址(南から)



2 近代の磁器



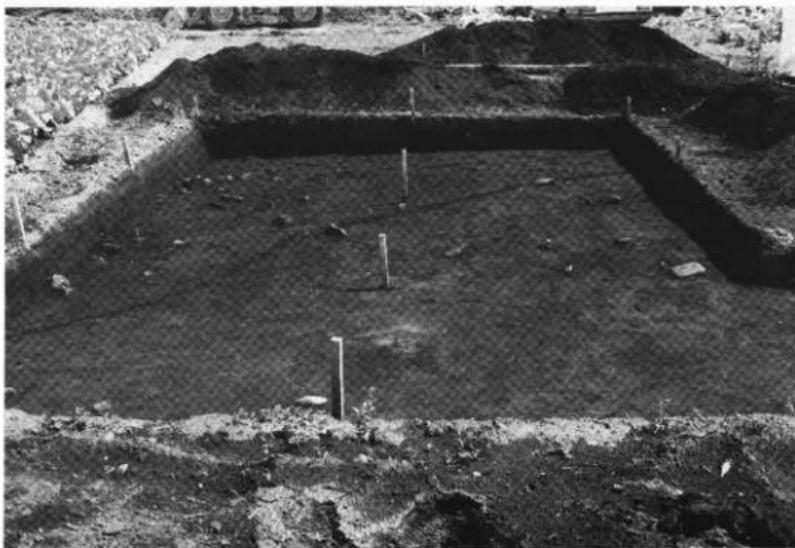
1 遺跡近景(南から)



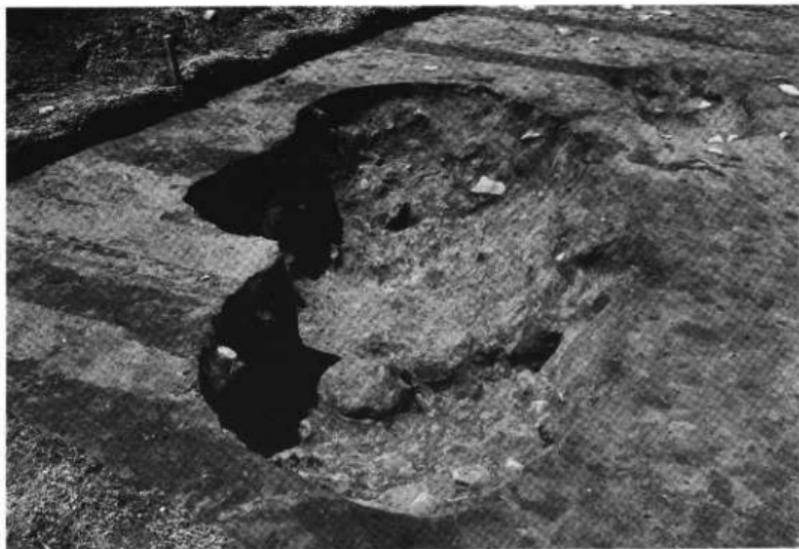
2 発掘開始状況(西から)



1 礫の覆瓦状構造 (BS-W-38 北から)



2 埋没谷の検出状況 (CD-F-44・45 北から)



1 第1～3号小堅穴（東北から）



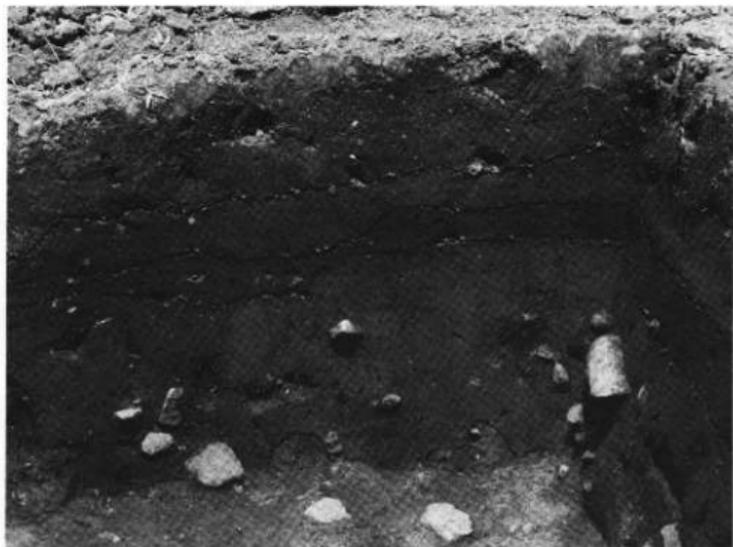
2 礎検出状況 (BM・N-38 南から)



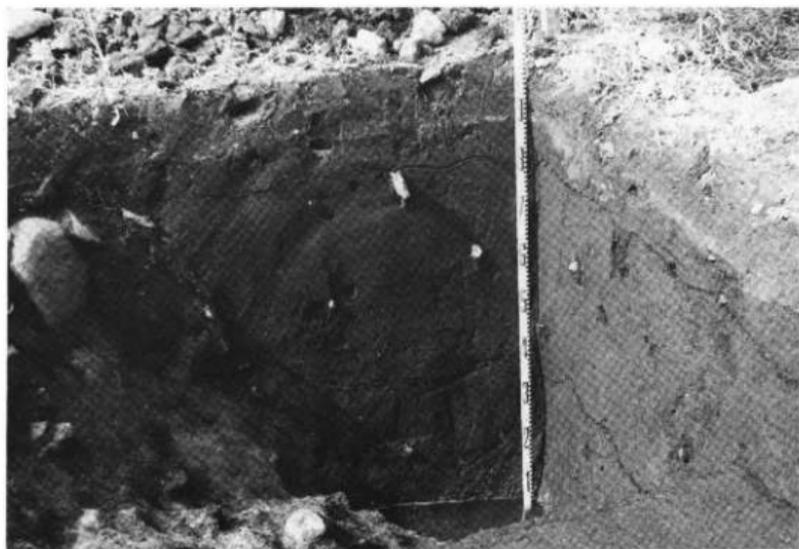
1 遺跡近景(南西から)



2 調査状況(西から)



1 土層断面 (CD-71 北壁)



2 埋没谷 (CH-42 北東隅)



1 遺跡近景(北から)



2 調査状況(北西から)



1 礫検出状況 (AY-16・17 東から)



2 礫検出状況 (AY-17 ローム層まで礫除去 西から)

原村の埋蔵文化財17

**梨の木沢・中道通・御射  
山沢・梨の木沢西遺跡**

御射山地区果営畑地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘調査報告書

発行日 1990年3月25日

発行 原村教育委員会  
長野県諏訪郡原村

印刷 日本ハイコム株式会社  
長野県塩尻市大字北小野4724  
電話 0263-56-2111